環海異聞　八

洋学文庫
文庫8
A 202
8

環海異聞巻之十四

長崎着岸より上陸以來迄之記

九月六日　晝九ッ時長崎伊王崎へ船を繫く

長崎の湊ハ此所なりといふ事船中の役人ヘ知せたる様子なれとも始ての事故海の浅深の程を考へ猶豫して船を廻し居る内既ニ本船の入りし事長崎ニて見附しと見得御役人両人中黒の小旗を建て番船ニ乗り見届ニ御越なり船中ニてハ長崎役所より見分の船来る迄早く船端へ漂流人を出し子細を申させよと使節命せり

大槻文庫

我々共是までの渡海ハ日本地と云ひ又ハこゝハ長
崎なりとてくるも何にをなにと言事歟を弁り
思ひ過せしに向ふより役船来るとつふよいよく我
邦の船にや心元なく見詰め居りし内次第に近付
を見れハ船の造り並に内に居しましかく日本
人なり嬉しさ限りなし爰まで漕付なハ使節
の命の如くなるへしと存ならして待受る処程なく
本船の際まて来られより様子尋られ趣の取
且喜ひ且悲しミ胸一ぱいに塞さかり一言も申
出さるへき様なら切かくある内ようやく子細言せて
人々も言ける故不圖存し付彼船へ乗り移り御國

件送状並に浦賀湊の御切手等を出し御役人に
見せけれハ夫に付きて御尋事あるに心定りて始て
言葉を出し漂流以来此度本船渡来且我々
を護送し来る次第よふしに申上れハ御聞
届の上此方の指圖に従ひ碇を下すへし向ふは
伊王崎へさしのそれを少し廻して内に入り碇を
下すへしとなり
　追々に此所風難の恐れなるよし申されし
　願く神嶋へ牽入碇を入るといふ
此節「オロシヤ」人にハ別に御尋事もなし直に船を引
返し夜五つ時頃に至り御検使両人
目安方 行方覚左衛門
菊沢左平とやらん

大小通詞差添同日
ふ人のりし阿蘭陀人両人一人ハ加比丹同一疋一人ハ役人某
七時頃出船五時頃伊王崎へ至るとふ番船に乗り参りし本船へ移り参り
使節我々へ申には本國にて作り與へられし日本
仕立の服を着替罷出候しと指図に付是を着用
し罷出候者殿々の次第御役人方委細に御糺問有
此節使節口にサノツ止を椅子に掛ける阿蘭陀の
加比丹と同間へ入り立て居るて何か問答ある様子に
倩加比丹使節の服付を見て甚恐れる氣色なり
大通辞石橋助左衛門とふ人彼役人「テンリヒ」とふ者
へ對話諸事分りるよし也使節阿蘭陀加比丹を
見彼を位階も至く早きものなり我と同座

さへきとやうなし用事済し上ハ引退るせ椅へ上せ
置ル様傍の役人に指図せし様子にて加比丹ことを
退き椅へ上て居るて我々共御尋一通り済てて
其所を退出せし故其後の事見聞せさて此節使節
よりて先年渡し置きし御證文ある候しと御尋
ありて是を指出す至て大切に箱詰にいたし錦襴
の覆を懸茶して棒け出せる趣きなり御引合と
有て國王よりの書簡寫とも指出せし由獻上物の内
何か一品出せしと聞けり
國王の書翰結構なり上覆のきれをかけ
箱入にて船中にありしを見しことあるも内

の文意等の事を聞及たれ
此節兵器並焔硝等暫く御取上ケと
聞りり是を此地にて其御定法なりといふ
事ハ兼て聞及書き物にもある事と見へ
最初より覚悟して指出せしとなり
右御糺し事等済く御役人衆加比丹も共に帰船せ
らましたり

附記

長崎魯西亜船着岸の
最初御検使御尋之次第寫

九月六日

一天草見張御番所より飛船を以午の方に
相當り白帆相見へ候段御注進有之無程野母
小瀬戸よりも御注進有之右に付加比丹存寄
承り申上候様被仰付同人には相糺れは外に異國
船渡来之心當無之由にハ先達而別段風説
申上候通りユス國船（ヲロシアノ）にても可有御座ハ
之段申出る直に御役所へ罷上り御用人を以申上
其末小瀬戸より八里程之御注進有之候に付
加比丹沖へ被召連候段被仰渡申中刻加比
丹沖へ罷越まて酉ノ下刻伊王嶌沖五町程沖
に碇を入亥の刻御検使此方出役並加比

丹兼船船頭部屋ニ御入被成候処頭分之
者其所ニ罷在左右ニ役掛りの者共相控
附添

船頭部屋入口足軽左右両人罷在劔仕込ミ鉄炮
を持腰ニも早合入候大こふらんの様成物を提け厳重
ニ相守り居ル

一御検使より御尋之次第

一其方共ハ何國の者ニ候哉
答　ヲロシア人ニ有之候

一何故ニ渡来いたし候哉
ヲロシヤ國王より江府へ三通之書翰
並ニ献貢拜禮相勤度使節の為渡
来仕候

一先年蝦夷地ニ相渡候砌信牌御渡被成候
右者此節持渡候哉
右持渡り則信牌取出し御検使ニ入
御覧候事

一ヲロシヤ國より何頃出船致候哉且何國ニ
立寄候哉委細申上候様兼而節等兼候事
此儀先ニ書載有之事

一江府表並御奉行所ニ差出ス書翰検使ニ
可相渡候事
此儀江府表ニ捧候書翰同所ニ而参上直ニ指上可申候
御奉行所ニ差出ス書簡も直ニ持参仕度何分

佗の御方へ難指上候事

一 信牌検使ゟ相渡候事

是又御役所ゟ直ニ持参仕度候事

一 御國法の事故武器玉薬今晩卸候支

此儀畏候ヘ共然夜中玉薬卸候事何分難
致明日卸申度く此儀御願申上候事

右之御尋中加比丹乗船頭分之者互ニ
禮を盡し相對之應對ニ相見得候

一 ヲロシヤ人より申上候

一 拾二ヶ年以前同所ゟ日本船漂流仕右
乗組之者共之内四人此節連渡九人之者
同所ゟ相残居候都合拾六人漂流仕候由

御尋

残九人之者共を何故残候哉

御答ヲロシヤ國ニ残り居滞在致候を
相好候由兼り候事

一 只今の繋り場所瀬方多く相見得万一風
波之節ハ無心元候間早々湊内へ御挽入
被下度候事

其儀容易ニハ難成然し願出候趣御奉行
所ゟ可申上由

一明日ニても御奉行所へ罷上り可申哉之事
其儀追而御沙汰ニ可被及候
右御糺相済候上漂流人四人之者共被呼出
御糺之次第左ニ記
一其方共何國之者ニ候哉
仙臺之者共ニ御坐候
一仙臺ニ何と申所之者ニ候哉
御答左之通
寒沢村 津太夫 六十一才
室之濱 儀平 四十三才
同 左平 四十二才
寒風澤 太十郎 三十四才

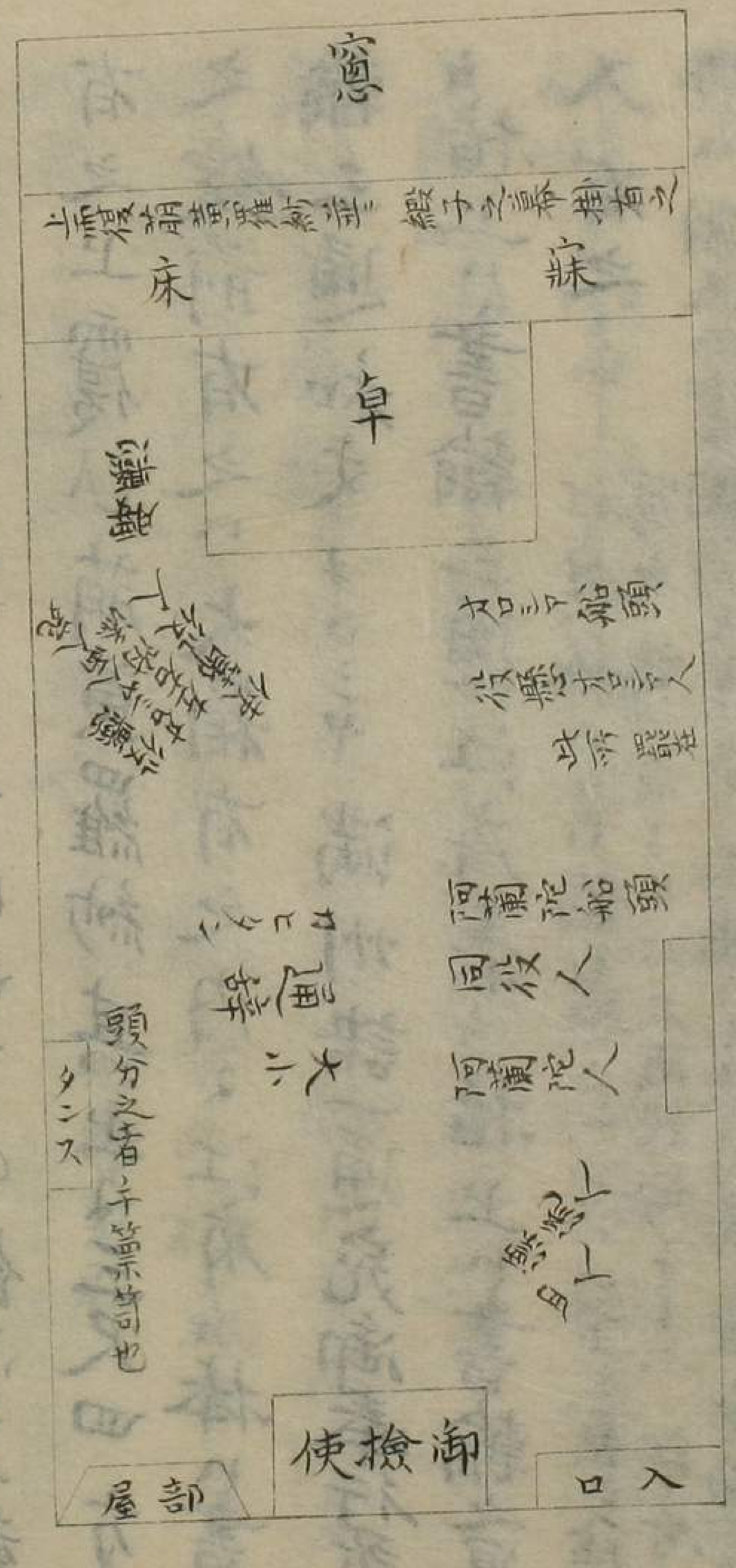
一何年何月何日仙臺出船致候哉
寛政五丑年十一月七日出船仕候
一オロシヤ國ニ何頃致漂着候哉
丑十一月廿七日難船ニ逢ひ翌六寅五月
十日ニ覚オロシヤ國ニ漂流仕候
右七日廿七日之日附漂客等言所ニ違へり
疑くハ傳寫の誤りなるらん
一何を積受仙臺出船致候哉
仙臺より江戸表ニ御城米積受出船

一其方共よりオロシヤ人ぇ相願此節乗組
仕候
参候哉
オロシヤ國王より被召出其方共日本へ帰國
致度候哉と御尋御座候ニ付帰國仕度旨
申上候処尤候者此節日本ぇ差遣候旨
被申聞乗組参り申候
一船の名石数等ハ如何ニ候哉
名ハ若宮丸石数八百石二十六反帆ニて
御座候
一乗組何人ニて有之候哉
都合拾六人乗組三人ハオロシヤ國ニて病
死仕残り九人ハオロシヤ國ぇ残り居申候
一九人ハ何故残居申候哉
至て大國の儀ニ御座候間オロシヤ出船之頃
九人之者共居合不申候尤右九人之内
両人極老ニて手足も不叶ニ有之其上
病氣ニ而御座候由ニ而無餘儀相残申候
一右之漂流人共何れもオロシヤ人服着致候
服ハ白太綿縞木綿之服ニオロシヤ言葉よく
覚居候様子ニ御座候
一御検使御乗船之節ハ彼是軽七人餝仕込候鎌

炮を持腰ニ早合を提け前ニ抜身の剱を持
一人大き成太鼓を首ニ掛何連も列を正し
相並居太鼓を打出し合図として抜身之剱
を持い者何ニゟ差配いゐし剱を振り上ヶ七人
之内一人進出鉄炮打い仕形致し跡六人も同様
仕形を以ゐしい上頭分之者船頭部屋階子
上段迄御迎ひニ罷出る同所へ御入御挨拶申上る
船頭部屋饒り付 入り口左り脇凡壹間入半
間程之床上霞大杢緞子の様成きれ
此所ニ御検使之坐也 但凡八九疊敷程
真向窓硝子障子窓真中ニ柱あり大鏡

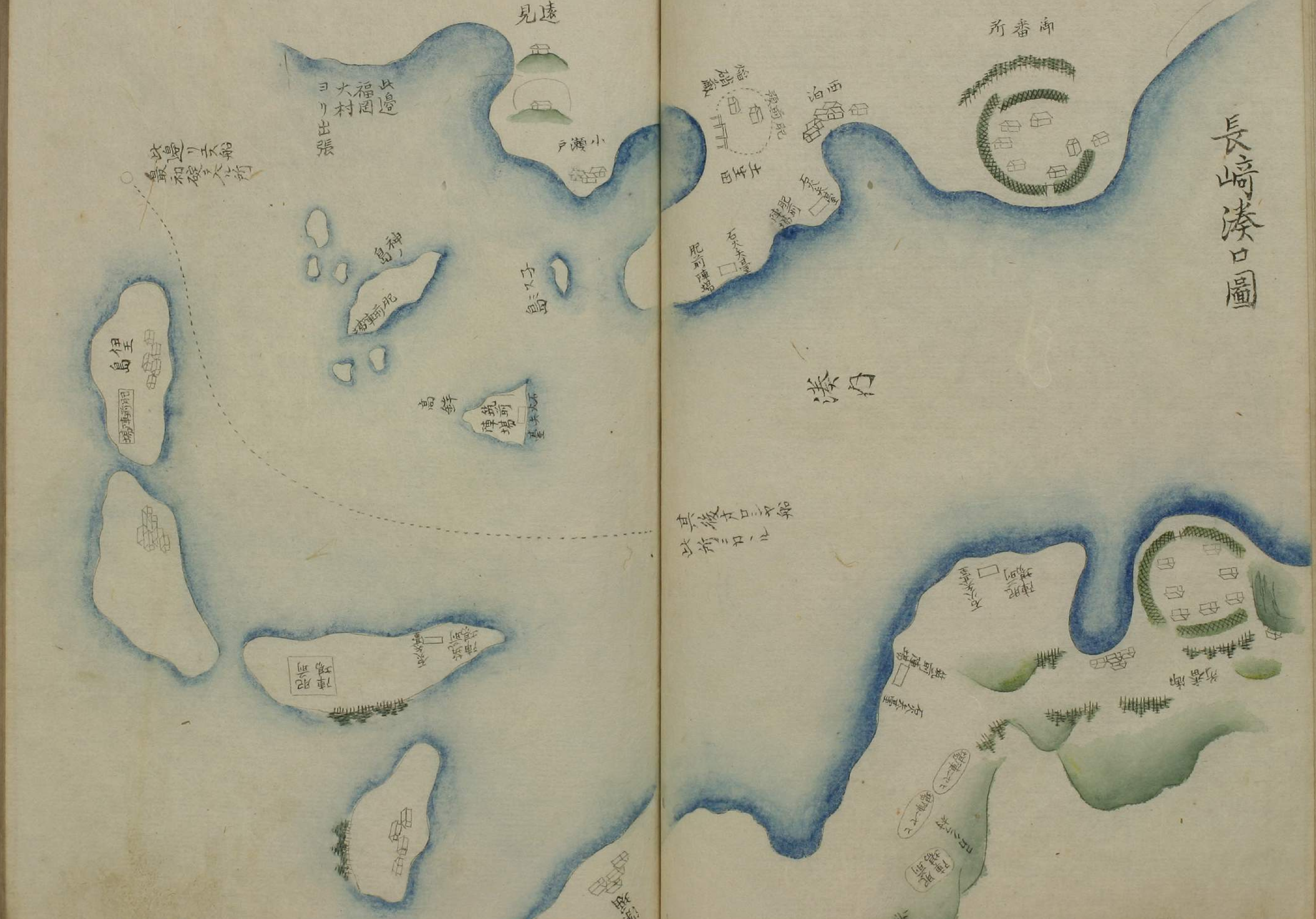
を懸け置り前ニ半間四方の飯臺之類
有之上霞ひ萌黄羅紗其上ニ三尺四方
之錠前有之い大箱有之内ニ江府ゟ捧い書
翰三通和文ヲロシヤ 満州語一通宛御奉行所
ゟ指上い書翰三通江府表ゟ指上い書翰之寫
入有之 江府へ捧い書翰三通といふヨリ以下 原文傳
写之誤り有るニ似不成語挨もあふ 江府ゟ
捧い国王の書翰同意の事 三通りニ認持参之由壹通ゟ
和文ニ認一通ゟ本国ヲロシア辞ニ調へ一通ゟ満州語を用ひ
て書い由右同様の寫しも持参すと是ゟ御奉行所へ御内見ニ相
入使節之趣意先以御承知被成いためニ致い事と見ゆ文章
三様ニ致し 遣へせしを何連の文ニても御聞取宜方ニ御合点
被為在い様ニと心を用ひし事成ゐし
金ニとふるニ何連も上霞ひ致有之右箱と

又外に小箱有之内にも信牌入有之間内を
不残大形花毛氈敷有之左右に腰懸け有

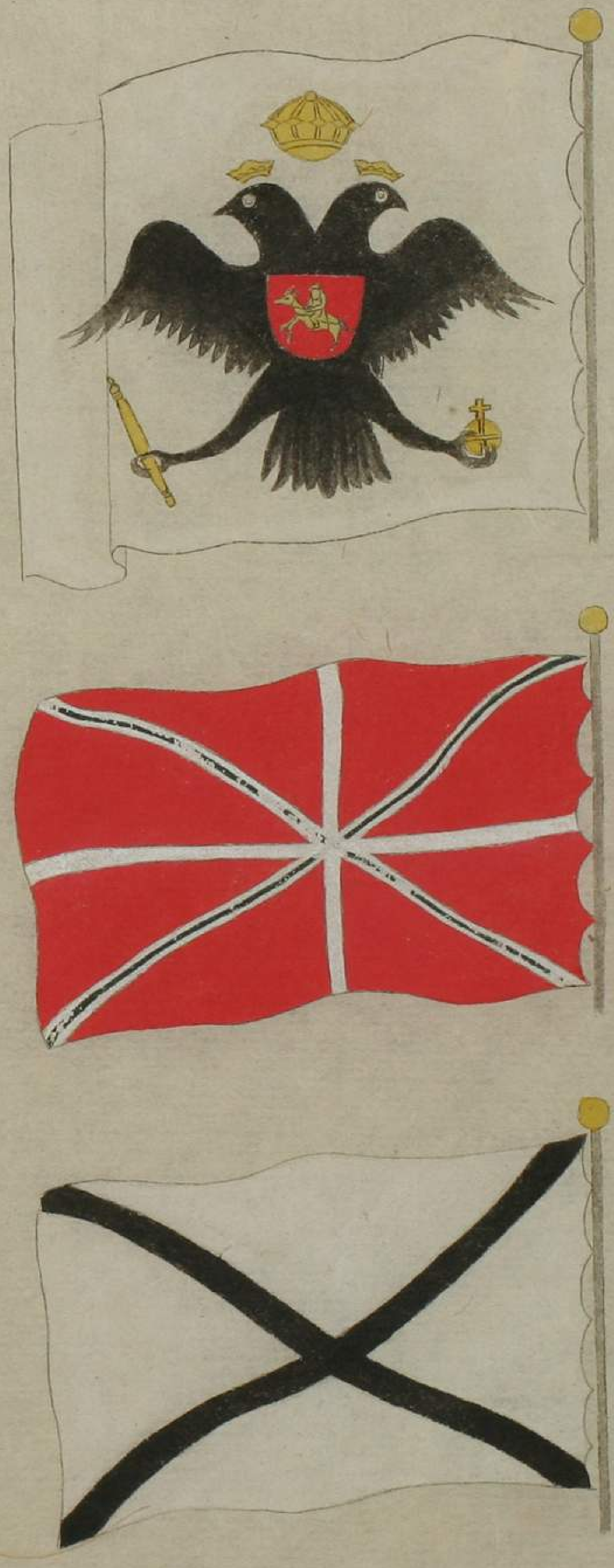


是者長崎通辞方より流布せる其節之書留と
見ゆ本編と併せ見て此時之様子を知るに足る
る故に此所に抄録す
夜中引船にて木鉢浦といふ所へ擄き入る
長崎を此節諏訪御神事ありとて前後旨斗
の間通路なし　御番船相附きし　追々此以後
段々湊内へ御引入となり假小屋懸等出来
るり即木鉢浦へ仮屋立ち暫くここに上陸致させ
夜しとあけるに至て廣畧かりとてなくなとあり　此邊の
右一々覚へ不申に長崎にての記聞
別に記せるの有
此節佐賀福岡よりの御手當
公儀御取扱等の支別に録せる物有これに附せり

長崎湊口圖



魯西亜國船印小旗圖



按西洋ニテ鷲鳥形ヲ以テ徽号トナスモノ多ナリ其来由ヲ譯スルニ本朝開化天皇ノ五十六年ニアタリテ邏馬大國ヲ司リ「ユス、ベウリス」ナル者其軍旗ニ鷲鳥ヲ画キシニ始リテ其後邏馬尼勒祭亜ノ帝王皆双頭ノ鷲鳥ヲ以テ其徽号トス此双頭ノ鷲鳥右ニ珠ヲ把リ左ニ笏ヲ把ルモノハ其原ハ尼勒祭亜ノ帝國ノ徽号ナリシカルニ魯西亜ノ主「ヨハンネス、バシリユス」ナル者尼勒祭亜ノ女「リヒア」ヲ娶テ尼勒祭亜ノ帝号ヲ受シヨリ其徽号ヲ傳ヘタルナリ珠ハ和蘭語ニテ「レイキス、アツプル」ト云其形コレ帝者ノ手ニ把ル所ノ室器ナリ笏ハ和蘭語ニテ「レイキス、スタフ」又「スセフテル」ト云其形如此ナリ鷲鳥ノ胸ニアルモノハ魯西亜本國ノ徽号ニテ騎馬ノ人鉾ヲ以テ龍ヲ刺スノ形ナリコレヲ「シント、ゼオルゲ」ノ服章トイフ

魯西亜船入津圖

肥後
大村
佐賀

追々上陸の事 相願ひ一本船破壊の修理も仕度
趣等段々申上候由にて梅ヶ崎といふ所に假屋出来
十二月十七日使節を始 役付の者都合二拾人
上陸し其所に住居
飲食調理の者も其中にあり 此餘は船に
住居
佐賀ゟ御召船龍王丸に乗移り上陸尤其餘ははつていら
船へのらせたり漂流人四人の者も一同上陸させて長崎
より傳聞せし

魯西亜人客館圖

右ハ梅ヶ崎ニ建ツ所の魯西亜客館の略繪図之長崎の湊口の図を岡より草畧の圖ニして荒増を示せるなり　本船入津警固番船等も皆大略なり　是らの正圖を公邉ニハくハしく認て奉りし由　彼本船の図も遠見しける畧図長崎より　送りしものを冩せり

俵物藏と之ニ有り来りの御藏の前へ　仮屋御補理其御藏迄作りかけける　玄関を新規ニ建て使節の居间を有来の坐鋪なり　六疊敷ニて　次の间を

有り其土藏迄造り懸ありし間々部屋々を仕切り
役付の者共指置かる使節へハ番士両人宛附居る
時代りと見ゆ惣圍出入の門壹ヶ所あり門番を
附て警固嚴重なり
獻上物ハ不残右明き藏へ入置
其中大鏡ハ横壹丈五尺長四間厚四寸
五分縁りは金にて牡丹唐草の様成物彫付
有り裏へは板をあて
ヶ様の物故御藏へ入りかね戸前を破り横にしてよふ
く納め有り船の修復に付船中積荷碇綱迄も
不残御藏入となりし此運送五七日程も掛りて船

底には延銕と大石を積置けり是船足を重く
する為といふ海上船の破壊せしは船底ある々途の
ときに入る様になりたる所を繕ふといふ
食料等日々御送りあり尤望ミ品何によらず相
入〻添
彼人等何にても此方より望ミの品欠ある事なし
とて甚感しけり醤油ハ別て賞味せり味噌奈良
漬は用ひ馴さる物にや格別賞美せさりき
滞留中土地の景色を生写にせしもの夥數出来
たり物の影を鏡へ移し取りて写せし道具あり
其中日本婦人の姿を写せしは誠に其容よく似せた

又是着岸の頃餘程隔りたる高處より遠見
したりし物を此器へ移して寫せりとなり
按に其器は和蘭にていふドンクルカームルといふ
ものなるべし
其鳥草木の類願之上追々館内へ入て寫真せり
或は図によりて或は鳥抔は丸むきにして腹内へ別
に物を納め眼を入全代へ真に生物の如く作り成せる
ものあり其中野雉（ヤマドリ）抔は誠に飛動の勢に見へたり
館内に入りし物は野菜の類迄一々図をとりて夫々の
名を聞自ら是を唱へ呼ひて見其図傍に記す
図なき品も見聞次第盡く其名を書留む一品一

種も漏さる事なし其中ランソフといふ醫師画も
出来細工も極めて巧みなりき言葉抔も諸國の辞に
通し居る様子にて此人の通辯にて多く事辨せし
趣なり
太十郎は生得陰気偏屈の性なり本船上陸遅り
其後も何らの御下知等手間とりて我々御請取の事も
如何なる事にやと思ひ鬱滞せしにや一日不圖気
乱て臺所にて遣ふ刄物ぬかを盗み出し口中咥内
迄突きたれて かき廻したり血夥敷出既に残命
不定に見へたり館内彼人々も大に騒動し早速
御許へ御検使も来りき色々御糺あり狂気に

相違なき、次第も相分り本道両人外科壹人
吉雄幸齋相懸らる（口書別有）故に右の醫師共日々見舞
療治あり舌も切れて飲食言語も出来ぬ殊の外
悩みあり残り三人の者晝夜看病し未だ本性
なき故夜中も不寐の番をなし取扱大に心労
志たり追々ハ口中も愈へ候ても飲食更に通じ不
絶食三十日たりし取扱も甚く當惑なりし幸齋
何か工夫の漱薬（ウガイ）をなしけるか相應しく夫よりハ自由に
通る事になりて此手段にハ彼國の醫師も我折り
し様子也又其後ハ食事進み過ぎ色々氣を
付しかと頼りに欲しかり少しの間に然きさくし
等致せしにハ大に困り果て又其後ハ一向好ミ申さぬ
脇よりあてがひ次第免角無言にて床に就き居る
までにて今日に至れり

倩此節毎日醫師見舞館外に駕籠まへ置けり
彼人いつの間にか其駕の雛形を作りて是を時々
館内より外をのぞき見て形を寫せりと見ゆ是を
見るに日本の駕に少しも違はず皆々あきれ
果り記

長崎湊潮の干満も氣を付て見し様子なり
船中より上陸にいたりても誰一人空しく日を暮す者
なし或ハ測量等用或ハ書記或ハ画圖或ハ細工其

勢めに身残委しく暫時も閑居せん

子の年（文化元年甲子）二月廿日遇（廿九日と聞ゆ）江戸表より御目附衆（遠山金四郎殿）

長崎へ御着七日程遇きて同三月初六日（七日）使節を立山御役所へ御呼出し

此以来の事別に傳聞の紀事多し爰にを漂客言せし儘を録す

御役所へ使節並ナヨルといふ官人両人（是足輕頭ニ当り出る）外にカベタン（船師也）

「クルーセンステルンラングソロ」（醫師）へ 足軽一人外に沓取一人召連梅ヶ崎

より波戸ノ場へかゝり西屋敷前立山御役所へ行きし由

其節通行の町々ハ左右に幕を張詰し由 都合三度

程出しと覚ゆ

使節レサノット等の像並冠帽諸圖

ニコラ レサノット

歳四十二

上案針役
ラートマノフ
歳 三十四

劔ハ反リ有リ位階ニヨラス
長短好次第ト見ユ

歩卒（サウダ／アシカル）

此劔ハ筒ヨリ取リ放シニナル
丈夫ナル物ニテ一尺二三寸

同背面

足軽何れも對の衣服也濃萠黄羅紗なり其内大鞁を打者も別色なり
如斯躰の足輕二人宛使節の部屋の内ニ警固ニ相詰居ル一人ハ鉄炮一人ハ鎗を持なり一時宛ニ代る也

冠帽

使節我々に向ひ時々の噂に此度ハ當地にて御
取扱御丁寧の事と申候外の者共噺ニより本國
よりの願ハ不叶ケ様に色々御取扱の御厚きハ
格別にて客に来りたる様成ものと申候
獻上物不被為請願事も御免無之歸帆被仰渡
候事になりしに永々の逗留中通辭中へ世話に
なりし事故聊なから謝物いたし度と願ひし由
にて使節より贈物ありしと兼及申ハ我々も御
役所より御受取の儀被仰渡の節使節申にハ各
へ何ぞ土産に成へき品贈度事なれとも知る通の
次第故とても御免しハあるまし併少々の物ハ

苦しかるべし望ミ作得と云我々共答けるハ是
まて年月御厚恩ニなり何も外ニ願ハ事無之
厚き思召ニ受納致せしも同前御心支御無用下
さるべし度て申候ヘハ然ラ上ハせめて羅紗の裁をし
なりとも遣し度とて羅紗一束四人の者へ指出し
あり尤御届も申上よ紀よりふ計ふ座しこ之我々
ハ御國法も恐入固く辞退致せし事御検使ニハ
直ニ相願何も受用可致旨御指図有し故實受
あり
此品江戸者以後願之上　御上ゟ指上ル
使節何とも殊之外別ニ悦ニ申あけるま

本願済ハりし時々船の往来面會の事も有る
座し願不叶歸帆の上ハ是迄も此世まても出逢ふ
事あるべき様なしとて自ら足まて地を踏ミ付ケ
必ず地下まて逢ふ座しとて落涙志ありけり
出舘前我々携乃歸りたる持道具使節の
前へ出し御検使御立合まて御改色品尤之通り

一　浦賀切手書附　二枚
一　奥州仙臺より送状　二枚
一　若宮丸銭財布　一
一　方針　一

一 木綿〻〻入 弐
一 同 袷 五
一 同 單物 壹
一 同 半合羽 壹
一 同 襦半 壱
一 同 帯 二筋
一 同 股引 三足
一 同 脚半 壱足
一 同 足袋 壱
一 同 風呂敷 壱
一 秩父単羽織 壹

一 同 解裏 壱
一 岸縞解裏 壱
一 被綿 壱
一 毛織小午當 壱
一 矢立 壱本
一 紙入 壱
一 鋏 壹挺
一 伊勢宮御祓 壹
四人之者於魯西亜國貰物等品々覚
一 金銭 八十
一 銀袂時計 四

一 日本仕立絹綿入　四
一 同羽織　四
一 絹繻半　四
一 同股引　四足
一 同帯　四筋
一 草蒲團　大小七
一 同草木綿枕　六
一 羅紗繻半　四
一 同合羽　四
一 羅紗　壱反
右者國王より追々貰申候

一 金銭　六
一 銀銭　大小六百九
一 銅銭　八
一 衣類道具入箱　四
一 羅紗着物　四
一 同繻半　三
一 同合羽　壱
一 同股引　十足
一 絹草帯　三筋
一 同風呂敷　三
一 木綿並麻繻伴　二十九

一 同股引　拾足
一 同風呂敷　八
一 麻蒲團　五
一 毛織袷　三
一 同単帯　壱筋
一 同股引　二足
一 同合羽　四
一 めりやす並木綿帽子　七
一 同股引並足袋　二十四足
一 草鞋　三
一 同帽子　三

一 同沓　五足
一 紙入　四
一 手貫　弐
一 毛皮 ソーホリ貂皮　壱枚
一 同袋　壹
一 椰子水飲　弐
一 ぬ〻さそこ　三
一 火打　三
一 染木綿　二反
一 角木綿　弐
一 櫛　二枚

一 鋏不たん 七
一 鋏 二挺
一 剃刀箱 壱
一 錐 二本
一 錫錐 壱
一 同起 壱本
一 硝子瓶 壱
一 同玉 四
一 硝子器の折し 壱
一 烟管 三本
一 針入 壱

一 鏡 二面
一 眼鏡 壱
一 横文字本 壹冊
一 世界圖並船繪 拾三枚
一 麻地油繪 國王夫婦像 二枚
右者彼國逗留中稼溜候金銀銅銭
を以買調又者知音より追々貰申候
漂客曰彼金銭を「ガランツケ」和蘭
「キリチンザ」といふ銭ハ其形中ニ獣
の形ありて左右ニ鉞を持たる人の像
あり裏面ハ横文字あり 形圓く我小判より薄目も輕し

銀銭四百五十枚「ガランツ亡」を阿蘭陀なり阿蘭
に両替す
陀銭なし八日本にて交易なるへしと
いふ心にて贈りし事に聞ゆ「オロシア」
の金銭を「ガランツケ」より大きなり銀
銭四人前六百九十六銅銭拾四五枚
金銭四人前八拾九枚持参
銀銭を新古拾六通りあり皆持来
また開國帝王より「コカテリナ」當今祖母迄ゝ
王の像を鋳る當今の父王より以
来を文字かわりなり「ホコイ」といふ字
やと聞ゆり銅銭を年暦何百何年

といふ文字鋳付あるよし
右持道具品々を追々於御役所御取調へ
の改め乃書付より書抜てかつに補入さ
出舘以後於立山御役所御吟味口書別紙
有り 是を先達て御写留御付ふき既に御蔵本あり
茂質へ私に書留し物あまさとも御蔵本もあまたあり
にハ渡し无 御引渡の節金銀銅銭ハ悉く御役
所へ被 召上右代り御割合を以銀子被下置
候よし外持道具を最初不残御召上追て
可及御沙汰旨被 仰渡置御引渡の節不残
被相渡持参 御覧とも経て帰國せり
同月十日御引取りにて四人共に舘内を出 人々と白

別きを告く皆々再會期さへかしらて泣き悲しミ
扨夫より立山御役所御白洲ニ被召出一通り御糺も
あり其後追々罷出る 其口書別ニ有り 踏繪等被仰付相濟ミ
御定法の通 揚屋ニ被相入
御免ニて折々出牢 市中出もあり御取扱色々
御叮嚀難有 御事共なりき
同月十八日 魯西亜船も歸帆の由 我々ハ地頭へ受
取人指越候様命下りし由の噂傳聞しける故此上ハ
御國許よりの御左右いつりしと待暮し實ニ
不思儀ニして心願成就しかく歸朝せし嬉しさ
限りなし 十三ヶ年の年月を重ね故郷ニ旅出せん
事を喜ひ御たよりを待ミひ半里

環海異聞巻之十四畢

環海異聞巻之十五

雜事

寂和漂着せし「オンデレイツケ」といふ嶋を始て見出し「オロシイア」の手に屬せしハ「セリコフ」と言人なり此人諸洲遍歴せさる所なしとそ「ムスコウ」産土のものなり「イルコーツカ」にて去る卯の年病死五十二三とし きなり仍て思ふに右の嶋を從せしも三十年も前の事なる由し此「セリコフ」といふ者も十三四歳なり十七八歳迄「キセロフ」か父某か代に馬牽の奉公したる者なり生得利發者にて段々出世し遂に

高買方の番頭となり「キセロフ」ゟ手船「オホーツカ」
カミシヤーツカの両港仕出しの船に乗て廻りし内
始て「ナーツカ」を見出し船を寄せて容子を窺ひし
に夥敷海獣の漁猟ある場所と見受けれハ帰帆の
上其次第物語りしに 王上へも告訴して再ひ発
帆し其嶋々を懐け手に入むと其地に到りし処
時に島人見馴さる船と人象とを軽しミ漁
猟に用る鏢数百本を擲て船中へ打かけ当り
舟子共是を防きかねて許多怪我せし者も出来
大にあぐみしに「セリコフ」謀略を以て漸々是を
いひ諭し着岸なる事を得て遂にハ今の如く手に

附け帰服せしむる事になせしと也 此以後ハ本國
より船往来し交易に擬ひ御の物を與へ数多の
獣皮を貢納せしむるに至り追々其地に役所を
建て役人を置き三ヶ年に一遍宛交代し貨物
を送り獣皮を取立る事となれり
倩「セリコフ」は此帰國の後右大功によりて 王上より俸
録官職を賜り家冨て榮へ今の「キセロフ」とも肩
を比ぶる程の冨豪家となる「スドシリヨン」の身上なりと
人々羨ミ称せりと也 「スドシリヨン」を百万と言古文なり
然れとも「キセロフ」を恩顧の家なれハ同家の手を離
されハ諸國高買並に右の諸島へ送る交易代物

等も「ヲキセロフ」相共に致し續けり然るに近年五十
餘歳にて病死なり扨商人中間の者かねて「ヲキセ
ロフ」か勢益々盛なるをそねミ其大商中間を省
むとしけれとも「セリコフ」在世の内は彼か手前ありて是
を憚り各内評のミにてありしか「セリコフ」死去の上ハ
憚る所なしとて何れも申合せけるに「ヲキセロフ」をハその中
間を除きたり此前後「ヲキセロフ」か仕出しの船とも其
先きりして行違出来又近年「ヲホーツカ」より北アメ
リカ」に仕出せし船歸帆せすして三年を經ても行方
知れさる等の事甚怪しき事多し皆彼奸人
共の取為にもやと疑ひはれやかなしと申

此度漂客等を「ナアツカ」より送りて本國に歸帆せし
船並に船頭も「セリコフ」か手の者なりしと「イルコーツ
カ」にて着せし頃は已に「セリコフ」泉客となりしとて
逢ふ事も得さりき追々其後家にハあひたり今（四十歳餘なる）
へし女子一人あるのミにて跡相續の者なし夫故今を
後家になりて「ムスクウ」に引越し居住せしと倩此女
不身持にて多くの貨も大方つかひ盡せしとの噂な
り然れとも夫の功によりて王上よりの宛行も引
續き贈り自由足る故の事と聞ゆ
先年此島へ初て渡りし時嶋人より崇ありたる綜流
の痕ありとて碑を出して見せ又「セリコフ」も五十歳

少し餘にて死せりときけハ嶌の彼に属せしハ
遠き事にハあらしと見ゆ
「カミシヤーツカ」より松前の方第十八目の嶌まで「オロ
シイア」の領所となせり其島の首長を「ワシライ」と
いひし由此人「セリコフ」と共に諸國を經廻りし人な
りとそ

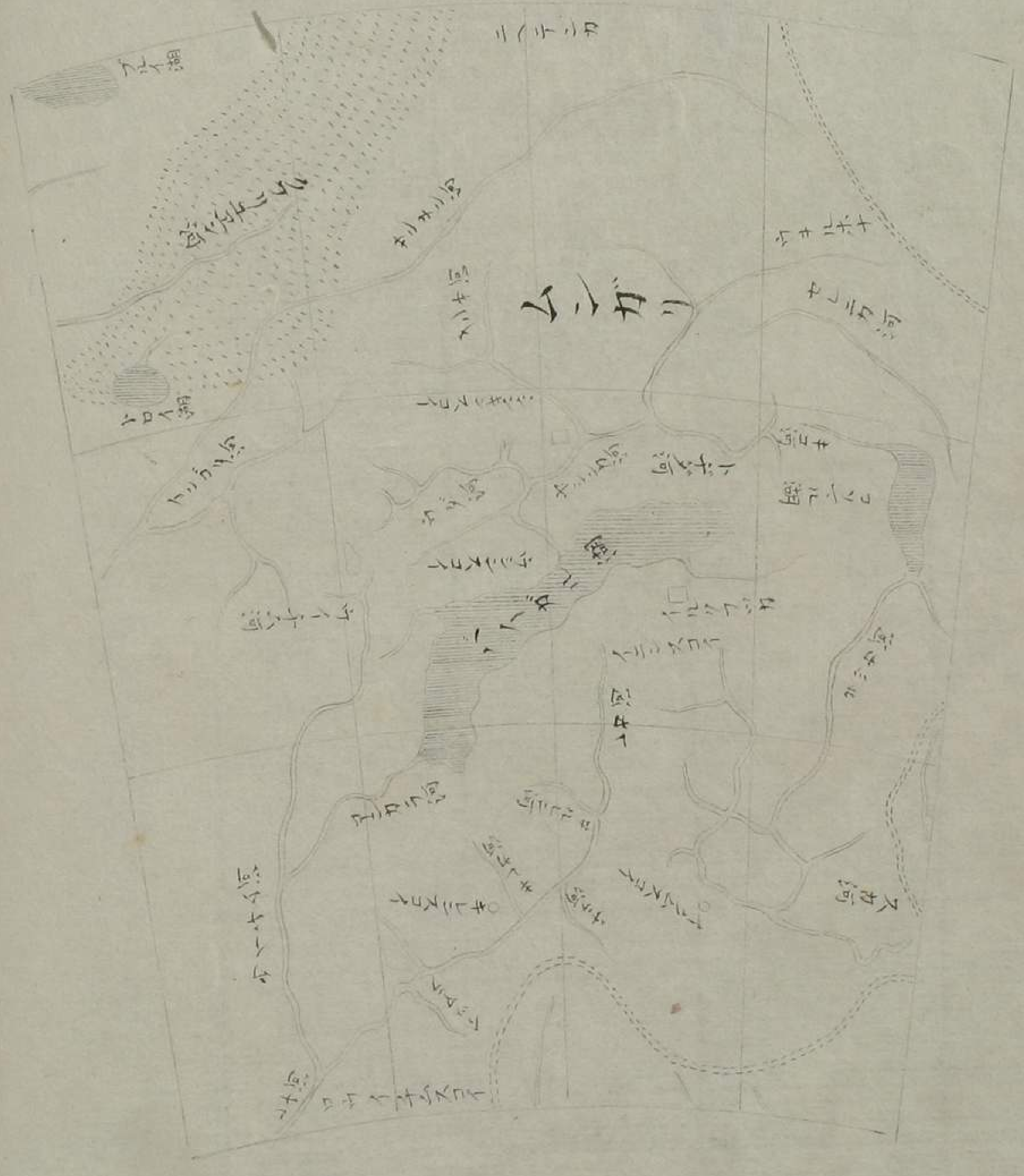
大麦（ヤチメン）挽割にして食ふ油「マスロ」を加へ羹食ふ
常にハ食さす何そある時ならてハ用ゆ常食ハ裸麦（ハダカムギ）
「アクセエ」の蒸餅（ケレブ）を用ゆ四貫目にて豊作の時ハ銅貨
十八銭凶作の年ハ五十銭より百銭迄去ル酉戌の年ハ
大不作なりしゆへ弐百八拾銭より三百銭迄賣買也

小麦「ペシニツ」ハ常の年ハ二拾五銭程なり右の
年ハ大小麦共に是に准して價高かりし極小
麦も粉にして蒸餅に作り祭日杯に製し常にハ
用ひす蕎麦ハ挽割にして賣る也外の穀類よりハ一
二銭も價貴し挽割並に粉の類水車の臼を用て
挽なるを「イルコーツカ」より都府への道中「カラスナヤリツカ」
の邊よりハ風扇（カザクルマ）を用ゆと見ゆ路傍（ミチバタ）高處に仕掛て
あるを所々にて見かけたり　圖九之巻に見ゆ
漂客共富商「キセロフ」が許に借宅して有りし内「ザー
モーリヨ」湖「バイカル」といへる大湖へ漁獵に遣さる事あり
光平其人々に加はりて行きたり此湖水の漁場

近き「イルコーツカ」より南にあたりて千里程あり是彼里
數なり又
七百里餘有といふ日本里數
にて八弐百里にハ足らざる可し
「イルコーツカ」近傍の諸地を此湖
より漁る魚類を専ら用ひ「キセロフ」大金銭出し　主立
て他の商人中間と共に彼湖へ網打の猟にやりけり
是ぞ遇る戌の年の事にて其三月なりしかた平等
も其人數に加はり當所より川船にて人數七千人
乗りにて船三艘漕出せり大船の内へ小船
をもつみ入し也　南へ向ひ
六十里登る是ぞ湖水の北の方にあたる所にて「ニコ
ライ」といふ地に寺あり「ニコライ
チユトトボリ」といふ　此所より湖水へ船を入
其地を去より東に向ひ山傳へ湖畔を引船にして
七百里行き「アンガリツケ」図に見ゆる「アンガラ」河
南邊の湖畔なるべしといふ所に

着此道程高山にて悉く石山なり或は登り
或は下りて峻岨を越へてこの所に船を牽き舟
なり本所を發船して三十一日を経て着岸せり
夫より場所を見立て、網をまき、滞留中
數千頭魚類を漁り獲ものあみを引網あり
地引の如し百八十尋二百尋あり其中「ホ、モリ」
といふ魚「タイメニ」といふ魚影數あるなり
皆是を塩漬樽詰にして數百箇となに

右者「オロシイア」本領惣國全圖より寫を取
なり此條前後の詰説と参考すへし「イル
クウツカ」と記せる所「イルコーツカ」なり其傍の川
より南へ登り船にて行へし成るへし正中の大
湖を即「バイカル」一名「ザーモーリヨ」なり「ムンガリ」と
記せるを蒙古なり唐山境の方なり「レナ河」を
「ヤコーツカ」より「イルコーツカ」へ續ける長流なるへし
是迄平に此図を出し示して覧する処也



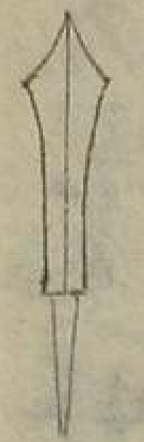
秡乙蛤鹿湖(バイカル)漁獵圖

又場所をかへて打網して「ヲシヤテレサ」といへる大魚二
尾を得たり其一尾大なるものは拾二貫目あり是又
段々に裁ち切樽に詰塩漬にしたり　扨「シヤテイ」
と呼ひて明礬に似たる物あり（焔ニ消石(エンシヤウ)の類）是に塩を搗(ツ)き
合せて魚を漬けるなり　如斯の大魚ハ此二味調合の
ものなれハ塩氣肉裏に透徹せさるとなり　此物にて
漬け貯へ置きハ幾年置ても腐敗する事又なきとそ
此所にても「ヲモリ」魚等も又彩數網に入りしかとも
塩と入物とに限りあれハ見えらんハ打網を留め右塩漬
の樽を盡く船に積ミ入帰帆せしかハ其六月にして
本所に帰着せり

扨湖畔に「トンゴス」といふ種族の人類あり此邊彼等
か住所地面故船壹艘に付銀五拾枚又百五拾枚を運
上として出し與へて網打せり
「ヨコライ」河源の向ふにあるたいなるの湖畔より水を隔
てあなたの南畔迄を湖上六十里あり是を渡り山
越に陸行すれハ「モンガリツケ」（当家吉十り）のかうて漢地(カラ)へ入るの道
中なりといふ冬月湖水一面に氷りつめたる時ハ「ケタ
イスコイ」（漢地）より高物の通路氷の上を渡り通るよしと云
又それより「イルコーツカ」迄の川筋も氷りたり流れる故
氷上往来し通路甚便利なりといふ暖氣の
節の通用ハ南の湖邊山道を湖に沿(ソ)ひ廻りて

たかなるの湖畔へ出る事三百里を経て「ニコライ」河邊へ
来る甚迂遠なりといへど
支那境へも七百里ありといふ　或二百里餘なるべし
此湖水色赤し中嶋もあり竪長サ彼里法にて
一千里（湖水の大なるなり）有といふ岸には殊更深しとや
此湖畔の上に千「ワアリホノアンカリッケ」といふ地の近
傍に住む夷族をば即「トンコス」なり此ともの定
まれる家居なし時々所々に居所を移す其
家作りといふ掩ひをば木材をたてあるへ外より
樺の皮を引廻し圍ひとす其廠（コヤ）乃正中に横に
木を架（ワタ）し自在といふ掩ひ物を下げ鍋をか

けるし灶を設ける物を煮食ふ其食物とは鳥
獣蟲蛇得るにまかせ時に臨みては火食を待ずと
いふ鹿の乳汁を飲む事他の牛酪を用ゆるが如し
且鹿を馴し使ふ事馬の如く乗り行き又物をも
駄す此族（トヒカラ）射（ユミ）つる事至て妙を得たり弓は
木にて作り長サ四尺五六寸有他の諸國の射る
とはあちこちらにて矢を後の方へつけて射發つく
箭の鏃（子）は



如此鉄にて長サ四寸許あり矢は
鳥羽三枚附る之常に矢筒を脊負て行くなる其
弓に妙を得しといふは天に仰き虚空に射發ち
挙る矢に跡より又繼（ツ）きて放ちて其空中の矢に

いつり射られて落　幾度となちても　いやまるなし
其尤平なるさましく見て目を驚かせりと
「ソーボリ」貂なる　此白里(シヘリ)地方の名産なり殊に此邊
に棲むものの尤上好なり　扨湖水の廻りハ
嶔々たる雪山なり其雪深き頃「ソーホリ」其所に（上品の皮にて銀七十枚程なり）
出つ「トンゴス」是を見すまして能射留るといふ「オロ
シイア」の領地となりし後年々此皮を貢す依て
此貢を取立の為め且土地の取締りに「アンカリッケ」
にて「オロシイフ」より役人二三人在勤するや
「トンコス」ニ異形の佛像を宗奉す皆銕にて
作れり又假面に作りて祭り置く也「アンガリッケ」

に鍛冶あり其佛像並に彼矢鏃及物とも
作るなり
「トンゴス」等か衣服ハ「イルコーツカ」にて買ひ求め皮
裘並羅紗類の服とも着用せり男女共に時々「イル
コーツカ」に是を調ふる為に往来せり
漠欄の間皆々「アンガリッケ」に小屋を打ち居住せし
内にも「トンゴス」等二三十人も来り右にもいへる如く
家を作りて住あり是等ハ此方にて漠りし臭類
をとらひ得んとしてなり　引綱の手間に雇んと相
謀れハ手間銭を高くとりて相手にならぬ程性懶
惰且貪欲なる者共にて只貪る事のミいひける

此時弓を射て見せしに射術ニも至て感心
なる事前ニもいへる如し
かくて皆々取仕舞歸帆せんとする頃ハ彼「トンゴス」
共又何方へか居所を移せり
「アンガリツケ」の内ニ河あり（名不聞図を按ニ「アンガラ」河なる歟）この川
「アモル」（是即支那所謂黒龍江）といふ川ニ合し「オロシイア」領と「ケタ
イスコイ」（支那ナリ）の領分境をなすといへり
同「イカル」湖より水源をなして川々多し其中二千
五百里の間「ヤコーツカ」に流るゝ川あり又「イルコーツカ」
に流るゝ川あり「ニコライ」ニも其湖水の出る口の取へ

又「ホリツカ」の方へ流るゝ川有といふ其外ニも
川々もあるなるべし
「イルコーツカ」滞留中いつの頃か年月ハ忘れしが
日蝕六分ばかりかけたる事あり土地の人ハ東
ニ気付し役所なれバ之を測り見し事も
有りしとや
「インペラトリ」（帝爵 帝號）の國ハ世界の中四ヶ所有一ヶ所
の名ハ覚へ留す一ツハ「オロシイスコイ」（魯西亜）二ツハ
「ヤツポンスコイ」（日本）三ツハ「ケタイスコイ」（支那）なりと覚
茂質按 其一ツハ入尓瑪泥亜（セルマニア）（欧羅巴洲ニ係る一大国なり 和蘭ニて「ホーコトイツ」といふ 又「ホトイツラント」とも一名「子イメツカ」魯西亜ニて「子イメツ」と呼ぶ由）なるべし 此餘

都児孛拾（魯西亜を「ドンツコイ」又「トロッカ」又「オトマシスコイ」といふ）と應帝亜（魯西亜を大莫卧児と云所皇都なり）
「インセイスコイ」といふを帝号なりと聞り
凡そ六ヶ所なりとぞ　我
日本を異域に比せば土壌狭小也といへ共
皇統一世萬古不易帝爵の國號にして
他の諸邦に優れるの外域の尤尊重
畏服する所以なり　往年到りし伊勢光
太夫並　此度の漂客等にも彼國の人々
常にいふ貴國を土地を狭少なれ共「イン
ペラトリ」の國なりと称美せしときけり
先年光太夫等を護送し松前迄来れるし「アダ
ムキリロイチラックスマン」なる先年「ペトルブルカ」にて
病死せりといふ其父「キリロイチ」なる去巳年　都
ペトルブルカより帰途「トボリツカ」といふ所にて病死せり
此人は種々の蟲類を串さしにて干し貯へ置
けりと　一躰学者なりとの噂あるを聞けり　其子
「ラックスマン」の死去を其後の叓なりとぞ
按に「キリロイチ」は光太夫を厚く世話やきし
人ときけり　都へ公用にて登りの節同道し
女帝に帰朝の願をも添しつかませしとく学
識有て兼て物産を好みしと尤　此業
王命を受しとなり　光太夫を「オホーツカ」迄送り

来りし道々も採薬せりと蟲類をあつめしのミ聞来りしを斤言まて實ハ物産家といふ事なりし

升といふものを見受ぬ賣物惣て目賣なり何によらず一切秤にかけて賣るなり

博奕ハ國中堅く法度なり私に戯むるを見る小名戈「カルタ」といふ札数三十六枚あり男女の合形あるなどあり「カルタイケライ」といへハかるたをうてといふ事なり 日本にあるかるた多ハ歸帆の時南亜墨利加にて「ホロトガリ」人の弄ぶを見られ是ハ全く我國に在る物と同し

按に「ホロトガリ」ハ「ホルトガル」波爾杜瓦爾 我邦にいふ「ポルトガル」とも云 又弘く南蛮なり 即耶蘇教法を弘め来りし國の其一つなるへし「カルタ」と云辞ハ惣て牌又圖版の義のよし欧羅巴洲中通用の辞なりとぞ今ハ諸国博戯の一名となりて通称ハ我方へハ耶蘇會士の傳へし奕器なるにや

儀平等四人歸帆のとき國帝より各賜りし袂時斗を都府まて作りし物なりとぞ

此袂時斗四箇共に獻呈せん事を請願ひしに其中一箇をとゞめられ三箇ハ皆返し

給たる茂質是等を披き其内を見るに

トバイレイ Thobayley ロンドン London 二万六十八百六十四 20864

といふ數十字を彫り付あり異言なれは
他を辨ずる處ろなしといへとも「ロンドン」籠動とある
を漢又利亜の都府なり此類籠動製
の物阿蘭陀持渡りしも夥くあり全く漢又
利亜細工と見へたり

、

國人銘々根付時斗を腰につけて居るなり故に常
に自ら時刻を知るなり
漂人等新都の名を「ピゼルボルカ」といふか称し「ペトル
ブルカ」と聞置し故押く是を質せしに彼人を
ペトルブルカと称するへしとセルボルカを我々訛て
言す処なりといひき故に本編皆ペトルブルカと
記せり

按に和蘭にはピトトルベルグといふ
ペトルブルカの都へは諸萬國の人来り居るといふ其
中地名を聞覚しは「ダルタ」韃而靼「ナイメツ」入尓瑪
泥亜「カランツケ」和蘭「アンゲリ」漢又利亜「ダンツケ」新那
瑪尓加「スウヱーツケ」雪際亜 の類凡そ七十七箇國の人々
来り集り旅宿するもあり又は永住の者もある
事幾千といふ事を志るしたり是等を引

合せらるゝ出會なる事もなく又服飾大抵似たる
者なれハ知り分つ可き様もなし但出行せし途
中にて黒人(クロホウ)を見かけたり是も「オロシイア」の服を着
し腰にハ根付時計を提て居りしか共面色黒漆
を塗りたる如く手先真黒なるに目をとめて問ひ尋
てかくと知りしなり 此黒人の事を「アラップ」と言よし
聞けり 尤諸國通辞も夫々あるよし之數日在留
せし「ガラフ」といふ官人の居館の近所に「イノスタンノ
コレンゲ」といふ大役所あり 此所にハ右の通辞役の者共
も居るよしなり「イノスタンノ」ハ外國 「コレンケ」ハ役所
ともいふ事ときこゆ 外人の衣食住の類何事も

も此役所より取斗よし聞けり
按にハ黒人ハ南アメリカの人なりしか「アラップ」と
いひしハ地名か又其種族の名か詳なる事
を得す

諸國より使節「ホスラニ〻四」といふ 来り居る 様子なり 何の子
細にて来るやきゝしに何れも旅宿を給ハりし「ユーン
ゾフガラフ」といふ國相の館に「イシパン」伊斯把尼亜(イスパニア)の王（王を「コロサ」といふ）
よりの使者なりといへる者逗留せしか見へたりきゝ
にも外國の使者なりといへるか拾五六人も見へたり其國
々の名をきゝしも留めす
上官の人々ハ國言(コトバ)を除かれ多くハ「子イメッ」の

辞をつかひ覚ゆるハ能く　諸國の人々に通辨する
故なりと云へり　但し　國王の前にてハ「オロシイア」辞を
つかふと聞り　扨「ガラニツケ」を阿蘭陀なり「子イメツ」
と「カラニツケ」との詞を少しの違ひなりといふ
按に「子イメツ」を入爾瑪泥亜（ゼルマニア）なり　和蘭（オランダ）にては
「ホーゴトイツ」即「カラニツケ」和蘭の宗国なり
和蘭語を「ホーゴトイツ」より轉し来る
由なれハ尤もある可し
漂客等「子イメツ」を「オロシイア」領分の地にて
舊都の北邊の國なりやと覚へ来れり
光太夫も其地の所在を志らす　按に「子イメツ」を「オロシイア」より

漂客等曰當今の如き
「ゼルマニア」と称して呼ふ名なり
子イメツより婚嫁せしといへり是同種にして又帝号の国なれハなるへし　魯西亜國志
譯説曰ムスクワ京城の郭外に入尓瑪尼亜
國人所居の府アリ造營美麗ニシテ人居
稠密ナリ是ヲ名ツケテ「スロクウテダインセム
スカ」又「ニーメツカ」ト号ス云々　漂客等ハ此
事を聞得て本地と思ひしなる可し　蓋
「子イメツ」を即此「ニーメツカ」なる事疑ひ
なし「ゼルマニア」の一名に「ユーメツ」と称する
事其地説も見ゆ
「スウエイツケ」雪際亜といふ國土地の宜き所を皆オロ

シイア」より攻め取りしとぞ今の新都「ペトルブルカ」
も「スウエイツ」原地なりと聞り取り残されて
自立せる「スウエイツケ」へ今も「オロシイア」より給米
を送り遣すといふ噂も聞けり
先年光大夫等を送り来りし時献上物の御館
禮に新打（ヤラ ラチ）の大長刀をつかはされし由是を彼（かしこ）にて
日本作の新兵器と称美し國寶の一となし置
よし「イルコーツカ」にて其噂を聞きけり
漂客等曰「オロシイア」にて阿蘭陀を「ガランツケ」と呼ぶ
又新和蘭（ヨウコンダ）を「ハーイコーランセ」と言彼國版の地図
中に見ゆ太十郎携来りし世界地図説本小

冊中に見ゆる
和蘭　ГОЛЛАНД（ゴルランド）
新和蘭　НОВ ГОЛЛАНДIЯ（ノウゴルランジヤ）　是オロシイア文字 オロシイア讀なり
「ハ」魯西亜にて「ガ」と云尼勃祭亜（ギリシア）國にて
「カムマ」と云ふ
和蘭にて尼勃祭亜（ギリシア）の字を註せる書に
即和蘭のガ（ギ グ）也と見へたり因て思ふに
和蘭の事を「ガランツケ」と称すといふものも「ガ」「ゴ」一声
の轉なるべし
歸帆の節大洋中にてさまよひて世界の真中へ来れり

とて祝ひをなせり水夫ともへも酒なと飲せし
又志なく船走り數百里廻りて忽ち直中へ
到きりとて同しく祝ひし事再回に及へり其
所を「エクワットル」といひし殊の外暑き所なりとぞ
按に「エクワットル」を羅甸(ラテン)名和蘭にて「ミツテルシ
井ニ」といふ(中線之儀)即赤道なり世界図を閲
するに初回を亜弗利加海にある赤道
直下の海上と見へ再回を亜墨利加海
上にある赤道直下なり是真に一大奇事
といふ可し欧羅巴洲の人世界を航海(コナワタリ)すら
其常とする所といへとも一回(ヒトタビ)も赤道下を通

船さへしも両回に及へるを常にあるへき事に
あらぬ魯西亜人も此度の船路初ての通
行なりとそ
此度の船人等新都の川口を發し「カナスダ」
へ出大船に乗り但「オ、ストゼイ」と呼る海
より開帆して「アンゲリ」(諳厄里亜)へ船をよせ夫より
南へむかひ加那里亜嶋(亜弗利加洲)へ立倚なり
を出て暫くして赤道直下を経南亜墨
利加へ向ひ「ブラシリイ」「エカテリナ」へ船を寄せ數
月滞留それより同洲の出先き「ヒユールランド」
といふ所の岬を廻り此洲を右に見して渡海

し再ひ赤道下に出ツ是より遥の洋中マル
ケイス島に船を泊め水を加ふ「カナスタ」より是
迄彼里数十六千里 按に我里法四千三百七十零里三六八なり あまと
いふ又北亜墨利加をそらかに右にして夫より
を東北へ乗出し亜細亜洲の東北隅「カミシヤ
ーツカ」の湊へ着し 又南に向ひ日本東南方
の沖にある海島を過き遍りて我西國九州
の邊隅長崎へ到りし也天下四大洲方の遠
洋を盡く経歴せりといふべし 和漢古今
未曽有の奇事是に比すべきものある
まじく 彼人々等も此度の大経歴前後

初てなりと聞ゆるも航海を常とするの俗
尚己に帰帆まて日本の西北海を廻り蝦夷諸
嶋を右に見再ひ「カミシヤーツカ」に到り我國の
環海一周し又再ひ日本東南の沖を過りて
支那の南海を渡り廣東の港に船をよせ
印度(インド)百爾西亜(ペルシア) 亜蠟比亜(アラビア)海を過遍り亜
弗利加洲の南邊を過遍りて三度赤道直下
を過き行きそしめ海路を取りて西北に向ひ
本國へ帰るよしの大量なれハ曽て奇異と
なすにも足らましきう 但我東方諸国の人
にありては開闢三千年上下縦横無き處の一

大奇事なり是唐山天竺といへとも固より
未た曾て無き事なるへし嗚呼奇なる哉古への
船路前代未聞の事なり従来我日本
船子颶(アクフウ)に逢ふて支那地方の諸嶋に
到て遠きは其南方安南天竺方角の諸
地へ漂着せるものは是迄幾囬なるを志らしに
其中天明の頃伊勢国光太夫等は北海の僻
島へ漂着し夫より魯西亜の内地へ入り其外
國欧邏巴洲の都府迄到り數年を経て
歸朝せしは未曾有の奇事なりしに是さへも
再ひ原路(モトノミチ)を取りてオホーツカ湊より松前へ帰

着せしなり然るに此度仙臺の漂客は亜細亜(アジア)洲
より欧邏巴洲の都下に到り其湊より開帆
して亜弗利加(アフリカ)洲亜墨利加(アメリカ)洲等の四大洲を一
周して驚濤數万里の海路を渉りて歸朝
せしは漢土日本は固(モト)より東方亜細亜洲方の
天下古今未曾有の一大珎事の最初な
るへし

此度の船に獻上心當と見へし火の發する仕掛の機
器あり箱の横前にあたる隅の方に手を以て廻す
ものあり是を廻せは糸に傳へて火光發すと上に
人形あり小筒の鉄炮を持せて立ッ發火其鉄炮へ

捩りて玉を發つ響をなせり又平盤の上に紙細工
の人形を伏せ置右仕掛の所を廻せは其人形起ちて
踊る名をは何といひていかなる仕掛の物にや奇妙の器こへ
と思ひけり

按に和蘭持渡りの機器「エリキシルテイト」にして
是俗間に「エレキテル」と呼ふ物なるへし人形に
銕炮をとらせたるハ新意と覺へたり

公邊呈書の中に載たる獻上物何れも異常珍器の
品々なり一両年以来製造に取かゝり漸出船前に
出来ありたるよし其中大鏡四枚ハ至て長大の物
なり長四間許横壹丈五尺程厚四寸五分斗り裏ハ
板張縁ハ金縁唐草様の物彫りて有此餘硝子
鏡大小四十餘あり「ムラムラ」といふ白石の板又盤の如く
きりたる物是ハ獻上物の臺にも用る様子なり又此石にて
歴代の諸王の像を彫刻せる物もあり

按に「ムラヽヽ」を和蘭にいふ「マルメルステーン」(石)に
して我肥後白島の白石の類と聞ゆ白瑪瑙
の屬なり

織物の巻物も數箇あり「セイウチ」の牙ハ三尺より
四尺位の物十五六本もあり此外種々の物數多あり
船中ハ大抵獻上心當の物のミ積來りて其餘ハ皆
船中要用の具ばかりなり交易心當のものとてハ一切

かしこ見へざり
最初漂着の嶋を始として「ヲロシイア」内地へ入り歸帆
までの間諸國の人を見受且出會もして容貌言語も
各異なる者其數を擧れハ左の如し

アリオウトウ　初め漂着せし「オンデレイツケ」諸島夷族惣名へ光太夫ら「アレオーツカ」といふ

ヲホーツカ　本領の地方へ着船せし湊なり

カミシヤーダ　「カムシヤーツカ」人といふ事

ヤコーテ　ヤコーツカ近傍の諸地其種類の人を指していふ

ブラーツケ　「イルコーツカ」近在土着人類惣名

ドンコス　「バイカル」湖邊の人類

ダルタ　韃而靼

ケタイツケ　唐山

チワシヤ　「イルコーツカ」より新都迄の半分道なりといふ所の地名

カメイカ　「ムスクウ」北邊の人

アラツプ　黒人（クロホウ）　「アメリカ」人なるべし

カルラ　　小人　　丈三尺四五寸あり

按に「モイデビ」といふ地方矮小のよし今「ホロシイア」領となりしと聞ゆ是ハ其土人なるにや「イルコーツカ」に在之内新蔵導に「カルラ」といふ小人有といふ事をかねて聞けり都にて使節「レサノット」の宅へ何事を行きたりし時暇乞に来掌りし官人の内此小人を伴ひ来まゐるにて始て見たり又見送りの人々カナスタの船へもつき来りし故再三見たりき世界中に小人國有といふハ和漢口碑になる事なれとも未く實否を志らず和蘭書にハ「モイデビ」の地人小人なりと説けり不思議にして我日本の人目のあたり始て邂逅せしまこれ又一奇事なり

スウエーツケ　　雪際亜（スウエツシア）

アンゲッコイ　　漢ヌ利亜（アンゲリア）

ハテンツースケ　　拂郎察（フランス）

ダンツケ　　第那瑪尓加（デーネマルカ）

イシパンン　　伊斯把你亜（イスパニア）

ホルトガル　　波爾杜瓦児（ボルトガル）

カナリツケ　　加那里亜（カナリア）　「イスパビ」の人住居しく領知となるといふ

ヱカテリナ　　南亜墨利加（アメリカ）伯西児（ブラーシリ）の内

マルケイス　　アメリカの孤嶌

サンペイツケ　　同　右二島北アメリカに属する成るべし

右二十二類北亜墨利加洲　最初漂着の「オンデレイツケ」諸島を北アメリカ洲に属すといふ　亜細亜（アジア）洲。欧邏巴洲。亜弗利加（アフリカ）洲。南亜墨利加洲。五方の人品を見知たり比類なるべきもなき異事なり

魯西亜の人類は何れも丈高く髪薄赤く眼彩は
さめ色なり其他の人々の容子は委しく見留ねど
止白里（シビリ）加山より東北「ミシヤーツカ」迄を惣称す 大洲は亜細亜に係る の人類は丈短く髪
黒く眼も黒し
傘は八本骨にて絹帛（キレ）にて張上人手り用ゆ常人
ハ雨天の時は「シアッパ」帽笠と羅紗の合羽を用ゆ羅紗は
能く雨をとほすものゆへ宿に帰れハ「ストーフ」にて水氣を
よくふりて物にかけて干し置なり
艪壹本にて艪押す舟を日本國へゆくと見ゆ
日本漂流人を都より「イルコーツカ」へ迎ひ来たり又伴ひ
行きし役人某は何々「オレキサンニダ口」といひしと覚ゆ 官を制「ポツーチク」ときけり 皮袋

を襟にかけて往来せり其袋の上にハ雙頭鷲の圖
号を付たるもの駅路の鑑札なといふものか又黒印
なといふ類き物にや道中駅々にて人是を見て甚畏
敬し何事も聊か遅滞する事なし是を「メッタリ」と 別に見ゆ
とハ又ご章の違しものにや
粘の用となさるものに膠（ニカハ）の如きものゝ魚より取るといふ何
とやら言魚の頭中に在るなる物有り是を煮いせて
用ゆ紙其外の物を接くに皆是をつかふよし粘着
するへ書簡の封しめハ赤色にて小さき棒の如く作りたる
物を蠟燭の火にて炙り溶かして塗り付て其上に印を
押すなり

按に是和蘭にフリーヒラツカ（書簡蝋）といふものと見ゆ
蟲白蝋と松脂と合せ黄丹にて色を附し
たるものゝ由

草にて羊「パラン」綿羊「ヤマニ」野牛ヤギ「コジヨウ」の三品にて作る
「コジヨウ」別てよろし鹿皮牛皮の二品をすべくよきなれ
し皮には制衣しかくし日本にて「ハルシヤ」皮と呼ふものなり
「ヤマニ」と見ゆ此度漂人等持渡りし皮蒲團皮枕なと
「ヤマニ」の皮ニ都府にて銀廿五枚に求め来れりと

去辰年彼暦數一千七百八十五年といふ此年女帝
エカテリナ崩れり是を「ゴツタイペレスタウエリ」といひ
是ハ天下様御過ぎなされたといふ事を「ゴツタイ」と云
崇め称する事にいふ辞「ペレスタウエリ」は帝王の死
去に限りいふ辞にて常人にはいはぬよし
按に崩御ともいふ言なるべし

凡そ新婚婿婦床入となり其姉妹の内閨房の
外に竊ふ既にして其新婦己が襦半を出して外に待
ものに渡す其者是を改め見て其志をしるすべき
物あれハ是を其いけの日里方へ送る里方にハ大ひ
に悦ふ聟も礼に行く両親雙ひ迎ふ聟其両
足に頭を付て礼をなし又立て両親の口へ己が口
を合せて是常式なりと作若又志るしもなけれは
礼にハ固より行く事なし聟ハ甚新婦の両親に

殊の外氣之毒かることいふ是新藏詰(ハナシ)なり

問新婚の婦年の長幼の論なくかく有るよ
叓不審(イブカシ)とひりきハ

答彼人惣て日本懷より生ひ立の變きる叓
多く是ハ初縁の者ハいつまでもかくいる事にや
といふ此事未く信しかく桜よ本朝古礼の
臙脂(ベニ)を其襯衣(シタギ)よ附けし類よして年長け
ても初縁を祝するの意よや

「ヲロシイア」本國焼なりといふ瀬戸物類外面よ金を
焼つけ至て見事なる物數種「リユマンシヅフガラプ」の家にて
見きりき

豕と馬とは睾丸(キンタマ)を取去る之豕の睾丸をとるを見るに
よ先つ其皮を堅てよたちより玉をとりそして手を
以て ピヨイ とたちき出し其痕へ塩を押込て其放
置るへ丸をとり其跡とをかくの如くすきハ肉能つき脂(アブラ)
もよしかく為といふ

桜よ食料よするとの故肥大なるしむる為なり
置し阿蘭陀よてハ食料のためよ畜ふ牛よ
睾丸をとるへ此キンキリ牛きハ「オス」と名つき
常牛を「クーヘースト」といふ雞よりもとるなりとそ
共よ脂のよくかくき肥太なくきむる為なり
と聞けり和蘭よて豕より取る叓を未きくらい

本領の海邊諸地馬なき所ニても犬をあつ
し使ふことなり此犬も亦睾丸を去るといふ
馬ハ使馬ハ惣て弐歳ニなれハ睾丸を去る其耳鼻
もなし之如此なれハかん強く遠道して草臥すとなり
但し父馬ニなるべきハ此事ニ及ばず其銘々使ひ馬ハ
其腰ニ焼印をおして持主の名を打ッ睾丸まで
人間も持戒の僧又音曲家抔ハ取り去るといふ先
年光太夫物語せり
梅ニ睾丸を抜きしことハ男女の情念を絶ッ故
ニ肉膝肥腴をなすなるべし其理詳なる事を
爰ニ洩し畢

劔まで能くきゝめあるは物と見へいつ様ニ焼めても又まもの
如く伸ひて真直ニなるなり前ハなくして先きの方銳利(トガリ)
なる物ニて突き通すまでの用をなすとかのや
人々正月と年の改りぬる時己まで一ヶ年を重ぬし
といふなり銘々誕暦ニ記ありし其あくる日より一ッ宛増
て其年齢を称するなり此時年を重る日とて各生れ
日を祝ふなり如此故ニ今二十歳の人二月四日の生れ日
なれハ二月四日迄まで廿歳ニなり五日よりまで廿歳と一日と
いひ三月六日ニ到れハ廿歳と壱ヶ月二日といふ夫故
死去して享年を碑ニ彫り付るにも四拾壱歳幾ヶ月
幾日半抔と書するなり

按ニ是凡そ欧羅巴洲の風俗と見ゆ洋中
まて死去し長崎の悟真寺に葬埋せし
甲必丹「ジユールコープ」の碑面を見しに享年
何歳幾月幾日と記せり扨生辰を祝ふ
も和漢共ニ有来りし事なれとも其日を以て
齢を重る時とハ定めすして冬の十一月ニ生れても
翌正月を二歳々々といふなり
鳥の目ゝるといふ事もあり鳥も何鳥か志らす但し度々
も見當らす
板硝子を切るにも水晶の如き玉石ニて節を付置てたち
きるなり名不覚

按ニ我か邦ニていふ「ギヤアニ」歟正名を「ジアヤント」なり
大光曰「オロシイア」ニて「ギヤマン」を「ビリアン」と云よし
「ツンガ」といふ病彼地方ニ多し土地恒寒の甲ニ在る病と
見ゆ常ニ煙草を吃さる者も此病を防くと言傳ふ此
症一躰甚敷寒く氣ニ中るより起る病々と云（烟草寒湿氣を避るの性功ある故なるへし）
其症先ハ初發ハ齦肉黒色となり軀體午豆
節脉をひきつめ肉硬くなりて色黒ミを帯ひ紫ニなり
動作する事能ハすして甚苦難す其攣（ヒキツリ）急をなさて
殊多くハ膝膕なり
漂客津太夫も漂着前沖合ニて此病を受立さることニ
なりて一身轉動なさす事能さして漸く人の肩ニすかりて

二便さへ便し難り追々復常を志るといへとも於今豆部寧
急し歩行不自在久数ハ得ならぬゆへ同船の内此病に罹り
し者外にも三人迄ありき「オホーツカ」辺にてハ厳寒の時
節ハ毎々此病者の多し「ヤコーテ」「ブラーツケ」等此病を
患る者を見うけれバ常に烟草を嗜ミ食ふて預防とす
故にやと人々いへり土人も甚是を恐るゝ病患なりとぞ
とし人歯齦腫病する者あまたは「ツンガ」にてハなしや杯いひて
人々なやみける事なり
按に此病和蘭にいふ「シキウルボイク」といふ病にて
其書所載せし「ツンガ」の症と符合せり是医宗
金鑑の書に出す所の青腿牙疳なり

イルコーツカに遊楽所となれる酒楼あり是を「タラビセラ
イ」と名付く
大光曰料理「茶屋」を「カランシヤ」といふ或ハ是を
いつもにハあらざれバやと云へり
手代番頭等もありて餘程大家なり　酒の類も種々有
上好と称するものを「アメリカ」「ハランソースケ」等より来る物にて
数品あり惣て葡萄酒の銘酒有座中にハ玉突きの
戯具を設け有るへし此突き玉の戯を「ヘヤ」と云（按に和蘭にて）
「ビルヤールト」といふ器財の類に詳なり　扨人々此楼に登りて酒宴を催して戯に
遊ぶ下物（サカナ）の類を他より呼ぶなり奥にて棄し銘々玉突
の勝負をなし鳴物をなさしもとして相楽む婢女も

あまりも其席に出て酌を取様の事はなし唯勝手元にて召仕ふを壹人見かけたり又慰に喫(ノム)烟草類数種あり白土にて製しやきたるものに志るめる烟管有(和蘭用ゆる所と同様)髣是に「テタイツケタバコ」(唐烟草)を盛りてのましむ一服の價銅銭五枚なりと扨此遊所へ間々上等の人も来り楽む容子なり人或を是にて多くの財を費したるには其産を乏しく窮厄なる族も少なからぬとぞ
使節「ロサノット」官職品級の譯たしかに聞す
按に阿蘭陀人譯文和解書上に「ヘールカーール」といふ重役の者なりと見へたり職外官にて内にも兼るものにや

外官にて國王の身近くも出る役儀のよし聞り此人の弟某を「ヘヨル」といふ官にて直勤せるよし「ロサノット」の妻も前にいへる「イルコーツカ」に有し豪商(オホアキヒト)「セリコフ」の娘なり縁談ありて七千里の道中「イルコーツカ」へ下りて婚姻を整し由其妻此度出帆の前年(戌の年なるべし)都にて病死せりといふ
亥年彼國年暦一千八百三年なり外國へ使者立てしも此年始めなりと承まてり
按に當主となりて最初といふ事歟又仕立船にて海上大廻りし日本迄の使節出せし事の初めなりといふ事にや前代唐山北京等へ

使者往来度々ありしと聞ゆるはく
日本人を手堅し唐人を虚飾(カザリ)多く實少し譬は
氷沙糖を交易物に渡せる其内に木行(キキレ)なと雜(マゼ)遣せ
あさましき仕形なりなと噂しあへり
本國今時に至りては世界中遍く通路せる国なし
但近國にてありあらし日本へ來り是迄表立通用な
して人を毎度噂ありしを聞けり
ガラシツケレ阿蘭陀 近年國中亂れ国王も弑されて今
時を國王なし晉西亜軍兵を遣し是人を平均し
國界に番兵を置と聞けりハランシリースケレと同様なり
といふ船中にても諸役人かくと物語れり

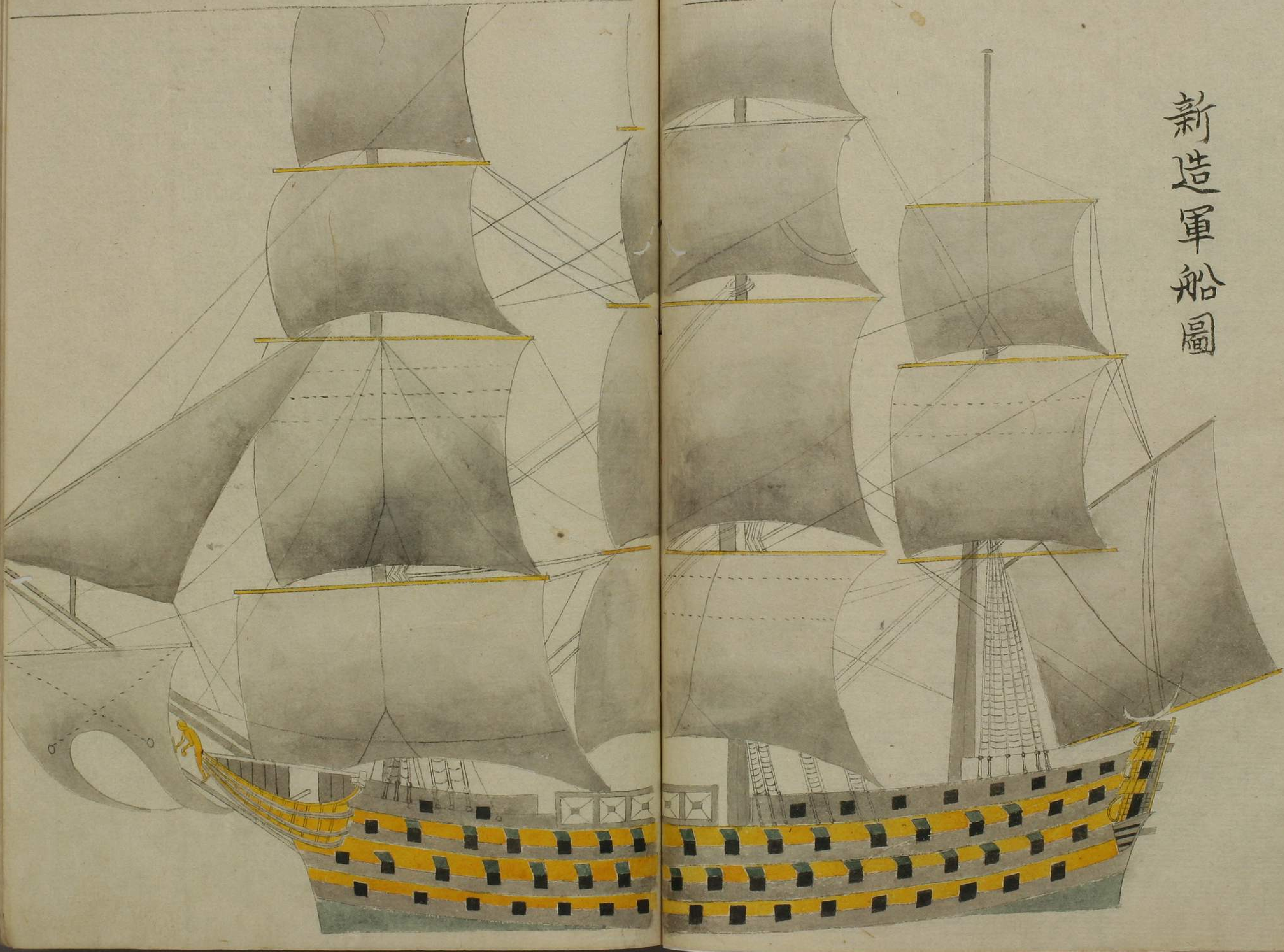
按に近年戦爭相續し風説書年々見得しり
王弑殺せしといふはいかにや又王をコニケラン
ドレへ逃けのひ居なりともいふ丑寅年以来
の風説言上書に當節本國筋漸平穏に
なりしと記せり右共に實否を志らす
本國より獻上物阿蘭陀に記し先年より兩度まて
送進しあれ共是を毎度さし出せしを傳達せり今
さらに來り問尋されは一向其沙汰聞へすとの噂を
聞長崎にて大ひに腹立せり定て貨物も貴拂し
なるゆへ甚不届なる致方と申せし由
按るに此事も又實事か虚説か辨すへからす

「ペトルフルガ」逗留中旅宿「リユーミンヅフガラプ」の近所にて
七百人乗の軍船の新造あり津太夫等行きて見るに
至つて長サ何遺忘間高サは底より八九間も有るべし
内の方は松の厚板にてこれを張り其表を又松板にて張り
其上へちやんを塗りあり扨水へ入る通りは銅にてこれを張り
是蟲の透さぬ為といふ帆柱も松の木を用ひ三本
繼きにて數は五本立つ繼き目へは鉄をまとふ太サ四五尺
あるべし長サ 國中松より外大木なき由へ船材皆松なりといふ 船中石火
矢數挺を設け置船へ上下するは傳馬船より綱
階子を用ゆるよし
兵粮は二三年分船中へ貯ふ皆蒸餅のよし壹人前

一日に百五拾匁宛の由
百五拾匁の蒸餅壹人前への積りに十分なる
ものよし此度の使節船に貯ふ蒸餅も
此割にて配分せり

・船中にて右新造船の圖模し與へし者あり下に
模寫せり

新造軍船圖

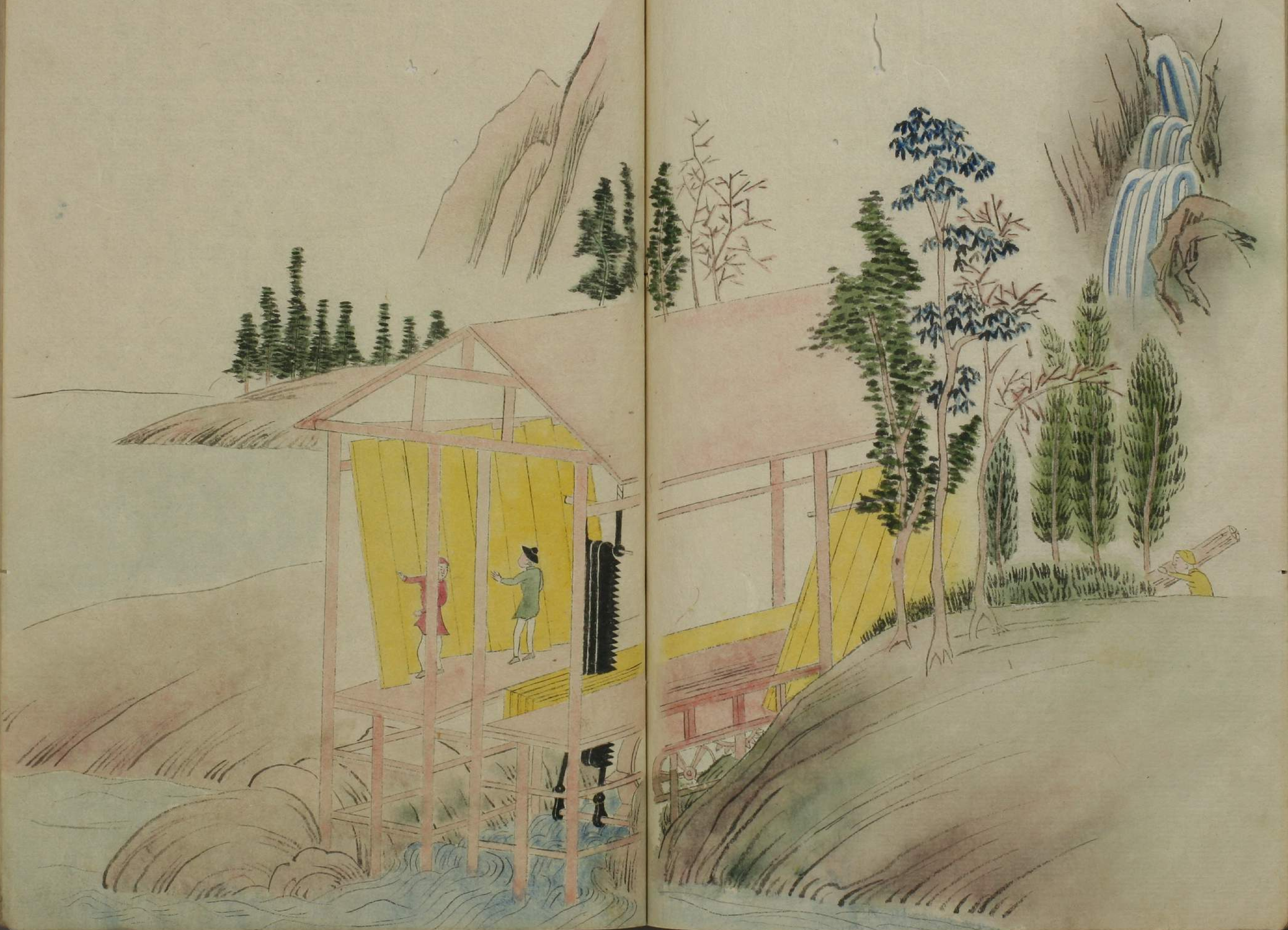


金銀借貸の證文を認る官紙より國號雙
鷲の黒印あり是を買求めて證文を認む是
によりて若し約定を違ひ返濟せざる時ハ公許の
上嚴科を蒙るといふ
惣て奉公人ハ一年限の定めにて人物によりて給金の
多少あり大抵見聞せしハ番頭日本の百両位に
あたる手代同廿五両位より三拾七両二分位に當る
下男同七両二分より拾両位迄下女同五両位に當る
人主請人口入杯もありて證文もとる趣なり人夫
一日の雇代日本の壹分位にあたる中人同拾匁位
にあたる下人同二朱位にあたる此以下四五匁位に當る

程の手間代をとる
豪高「キセロフ」に水車場所至て多し多くハ麦の
粉を挽せる所也其中近来此地にて初めて出来
たりとて水車の激勢にて大材木を板に挽らせる
所あり廠の内に大鋸三挺釣りて置其歯前の所へ
大材木の小口をのせおくに水勢にて漸くひき
割るゝ其挽きたるに従ひ材木段々と進み入様に
引割るゝなり又其あとも別の材木を續け置き先キ
のもの挽終るは其後をたくなり是其臺に
仕懸ありてたゞしく埋め置し地底に其機轉カラクリ
を設けしと見ゆ数々の人夫傍にありて挽割

板をとり行付又其あとを續けなさしむるを造あり斯仕懸故人力を費(ツイヤサズ)さす支なくして数枚の板此(シバ)刻(シ)の間に出来るなり
其仕懸の工夫水勢の程合を為めしうる試ミたる等に甚年間より再三試ミて仕直せし事数ヶ度是によりて大造の費用をかけ遂に成就し永世の大利を致せり

按に「ペトルブルク」都府圖中第五十六ノ第(コテウ)に和蘭人「サアガモートレンス」と記せり「サーガ」ハ鋸也「モーレンス」ハ石碾(イシウス)なり水勢にて石碾旋轉して材木を鋸挽なさしむ「イルコーツカ」にて「キセロフ」の創製せしめしものを巧人某是等見受て擬せるものにや



此工夫を深りて　都かくより此邊土へ来りありし
咎人某なる者の巧みなるは其妙巧に目を驚かし
なる迄にて其製巧見も聞もとめざりしことなり都
かくには所々ある事にや

此一事にても「キセロフ」か器量遠大推しえかる
者し莫太の費を出し彼をして再三精
巧を成就せしめ後来不盡無窮の大利
を為し得たり

梅に此巧に似たるの器大西器圖説と云書に
図状せる物あり世に機智の人ありて彼と此と
参へ考へ是を起さんとするの才を生せバ

此國にも又かゝる良便の奇器出つへきにや茂質
漂客等に對面の際此紀聞に諸国を添へん
と思ひよりしハ此説話をきけるに發起せり
故に最第一に聞ける所の大畧を右のごとく
図に作らしめて奉る事となしぬ但し其洋
なる事を得ざるを遺恨とするのミ

止白里(シビリ)地方廣漠の地を取り開きしハ多くハ流
刑に處せし人々を使ひしことなり此器を巧に出せし
流人もそれらの中なる者し「イルコーツカ」滞留せし日
都の方より咎人の流刑なりとて三十人程「オホーツカ」
の方へ引纏ひ行けるを見たり彼「アウタシ」の邊より

「オホーツカ、カミシヤーツカ」までの嶮難の山路なときり
開か志むるつとめなるにや

按に此多人數實に罪を犯せる咎人のミにハ
有まし何方とかいふ國を軍戦して擒にせ志
たる兵卒なるにやあらん

井戸の製衣我國に替る事なし皆衣袴つくるを専
煎茶には川水抔つかふ
婦人臙脂（べに）を附ることあり紙へ付たる懐中に蓄ふ
なり

「イルコーツカ」の内一ヶ寺涅槃像の画をかけ置たるを
見覚り全く此方にある物と同し

船中並ニ長崎滞留中見聞雜事

使節乗船表通十四巻ニ圖ある如し

長三十五間餘　幅拾弐間餘
高拾間餘　大柱三拾弐間餘
大たらん並経三間　やり出し拾三間
帆數十八片　石火矢三拾六挺

船の左右の脇ニ石火矢拾四挺宛艫の櫓の上ニ六挺又其上ニ小き石火矢弐挺自由ニ廻轉する様ニ仕懸たる物なり小なれとも筒長きゆへ遠きに達するといふ右石火矢共海上ニて海賊等心元なく思ふ所ニても筒先きを揃へ玉も其脇へ置也玉の重サ弐貫目前後なる由

碇ハ弐股ニして大ひなるを五頭重サ「フート」と云ふ法馬(フンドウ)ニて五百かゝるといふ容易ニ碇を下さすと云事なし

使節居所ハ平生ハ二階目の座敷二拾疊敷程の所なり時ニより三階目へもあり居まり艫の方なり左右と上へとハ皆硝子障子也日本への獻上物杯ハ艫の方へ揃置き船方ハ皆表の方ニ居り役人ハ皆部屋しあり

水主並ニ我々ハ鳥窠(トヤ)の如く作りたる物の内ニ夜中ハ臥しありぬらしてなる様ニ志たる物也

厨(クリヤ)を廻りを唐銅にて圍ミ上に烟窓(ケムタシ)あり竈ハ真中
にあり尤扉ありさつより出入すれども煮炊(ニタキ)の間
ハ固く鎖して少しも外へ火の散らぬ様にしたるもの
なり

食事　刻限陸と同し九ッ時と晩と両度之

食料を　蒸餅　豆　味噌豆の如くに　塩

挽割蕎麦

畜(カイ)置く物を　豕　二三十斗　牛　拾八疋

雞　弐百羽　此外にも定て多く有るべけれど尋問に遑あらずして書せず

船底へハその壓鉄と石を置けり其上へ飲水の樽を
並る事数百之樽の長サ八七尺程水ハ船中ニて八至て
大事に使ひ一日壹人に五合平均水を取るにも
道具にてきり少しも脇へ飛散らぬ様にしたる物なり
夫故水主抔ハ米洦(シロミツ)水の如き物にて顔をも洗ひしく
右水樽の上へハ食物類樽詰にて置
端船を五艘入置
帆を麻にて織るものや上の方へ掛る帆ハ何程も軽
きをよしとし地細なるを用ゆ
舵ハ外よりハ見へぬ様に附けおく
本船の名を「ナデシダ」といふ是を静謐太平なりし
を表し賞る事の様に聞けり
乗組の人々　役人を二十人ばかり水主を四拾人以上

あり覚し分を
「ユナラウ」「マヨル」「ニコライ」「バイトルイチレサイト」
是ハ此度の使節
「マヨル」官 三人
是使節添役の如き職ニ不絶其傍ニ附
居る 此内ニて足軽の頭をも勤む
其一 「ヤルマノカルライ」「子イメツ」の人
其二 「ミイトルイワノイチ」魯西亜人
其三 「イワンイワマノイチ」同
此人を「カミシヤーツカ」より乗込此地代官の弟ニ
是を足軽頭「カベタン」也「カミシヤーツカ」より入船

「カベタン」二人 船頭「ポーポローチン」の官ニ
其一「イワンヒヨータロイチ」同
此人を幼少より船を乗り習ひ師と共ニ
七ヶ年航(コナワタリ)りせしとぞ 又廣東のかくまく
度々渡海せしと云 其師迄を「アンゲリ」
人なり至て名誉の人ニて先年世界を乗
廻し十三ヶ年目ニ歸國せしと云船も三度
造りしと也 姓名ハ忘れたり「ヒヨータロイチ」
を此度「カナリツケ」へハ始て来たりと也
其二「ハカルイワノイチ」 魯西亜人

小船頭　三人
是ハ羅針なとを見且海上の里數を測る
是ハ糸綫流し引のけて算用して是を
知る様子なり
其一「イワンヘレフイチ」同
其二「ワシライワシライチチ」同
其三　名不覚
下案針役　三人　羅針を見る役
其一「ヤルマノヤルマノイチ」「子イメツ」人
其二「ヘーモロトロヘムイチ」魯西亜人

携乃来りし世界圖を長崎滞留中見懸て
曰各通船の道筋を覚へ置るやと我々
共答しハ數千萬里の事更ニ不覚と
いひけれハ上陸歸國の後人を尋る事
有ても當惑すへしとて海路を朱引し
て與へ置り此萬國圖を彼國ニて銀四枚
ニて求めたりと
其三　名遺忘（ワスレタリ）
醫者　三人
「トクトル」弐人
是ハ位官ある醫師なり即使節の医師ニ

「ラニツフ イワン ゲレゴロイチ　此人ハ「タシッケ」より乗組

此人諸國の言語ニ通せし故ニ長崎ニても専通辨す画も細工も出来ざる人之

壹人名不覚

「レイカレ」壹人　外料　是ハ位卑き醫師之

壹人　名不覚

「コッブ」二人　兄弟之

兄ハ　拾壹歳

弟ハ　拾歳

衆人此両童を　コッブ〳〵と呼へり

画師　二人

壹人　名不覚

壹人　同

此人船中より病氣ニて「カミシヤーツカ」より上陸

腹脹病へ右の出来る病と聞けり

草木鳥獣等を吟味する役壹人　生国不知

此人右画師病者の療治取扱の為ニ附添

「カミシヤーツカ」より上陸

右の代りニ壹人　名不覚

カミシヤーツカより入船

鉄炮指南人　壹人　名不覚

此人水主共の内へ鉄炮の持方打方等を教へ

足軽代りを勤させる積りニて伴ひ来りし

惰弱にて我儘多く船中使節の令に背く
事ありし故「カミシヤーツカ」へ留め置く依て
別に「カミシヤーツカ」より足軽残入る

足軽六人
「カミシヤーツカ」より入船

イタロス 水主也 數十人名一々不覚四十人餘
乗組皆々諸國の産なり其中 薩頴人あ
り力量衆に勝れり 水主頭六人表
にて三人舳にて三人居る此水主の内に舟働
残る者は勿論又沓縫仕立物其外大工
鍛冶等の業をも兼務居るく

按に右人々の姓名かなに聞違覚
差へもあるべき歟長崎にて書上ケし
姓名年齢の調へ書を得たり是又
傳写のあやまり有るに似たり是を以て
漂客に示し糺すに大氐皆彼等か
苗字なる由しといふ尤多し不覚へし
事とも聞へたる其中彼は是此は
某なる由しとて前聞と照し見て
参考ともなるへき歟と尤に附記
す名の下に細書せる物は再ひ漂客
に聞書せしく

ニコライ　レサノツト　使節（ポスラニシカ）　歳四十一
阿蘭陀通辞和解ニ使節の事和蘭詞ニて「アムバッサ チユール」といふ官職ハ和蘭ニて「カー ルヘイル」といふよし

クルーセンステル　「カベタン」船頭「イロンヒヨータロイチ」なるへし　子イメツ人　仝三十四

フリーデーデイ　マヨルと云官　仝二十四

コスセレフ　ロイトナント　仝三十三

ニイレシウス　是外科「イワン モシヘイイチ」なるべし長崎ニて風袋ほそくてあけし人なり　仝二十九

ロンベルルケ　下案針役　仝二十七

レーヘンスタルレン　同　仝二十七

カメンチコウ　案針役　仝四十二

ランシストルス　「ダンツケ」より入船の醫師「テニザフ、イワン、ゲレコロイチ」なるへし　同二十九

ラートマノフ　上案針役　仝三十四

ホスセー　「ホフラード」官名　仝三十三

ヘトロフ　陸船頭「イワンヘレブイチ」なるへし　仝二十四

ヱスヘンヘル　外料　仝四十二

コツヒポン　たま兄弟の「コツプ」なり　兄仝十六　弟仝十五

アロワチヱフ　下案針役　同二十七

ヒルリシキホウマン　同　仝二十七

ホルチル　「アストロイシイ」官名　仝三十

セメリン　「コミサル」官名　仝四十九

通計十九名

右傳聞のまゝを録してこゝに附せり桜に
是皆諸役懸りの者と見ゆ此餘足軽
六人水主數人の姓名年齢記さるゝの
なし

水主ニ至て達者に働くものゝ「カベタン」船頭ニ海上の事
甚だ巧者なる者にて譬ハ今暁何の刻今晩何
時ニ何国の方角に島山見ゆへし山あらる届し抔
いひて水主を帆柱の上へのぼせ遠見せしむるに其刻限
違ハず山を見付るなり　水主等ハ其示せるの好
にも不圖遠山など見付ても遠にハ「カベタン」へ注進なさしく
諸役付夫々の職を勤めて何時も怠らず晝夜

廿四時の内一時毎に（一時ハ我半時之）糸へ浮けを付て海原へ
流し取りあげ算用して里程を測り砂時斗を以て
一時の間に船幾里走りしといふ事を試る又重りを
付けたる糸を水底へ沈めて海の浅深を量り試む
且里程を測るに風の強弱にて違ひある故日輪を
測る様子なり夜ハ目鏡にて星を見て考に毎朝
是哉其役々より算用書付を出して九時前に「カベタン」
に指出すなり

桜に船長を「カベタン」と漂客共いふ大光「カビ
タン」といふ凡そ物の頭となる官名にて長共
頭ともいふ事のよし　元と羅甸語のよし

編中「カベタン」と記するものハ紀聞のまゝなり

役人も銘々根付時計と遠目鏡を所持す

使節の船日本　渡海の事　諸國へ先觸を廻せし様に見ゆ此度通船せるを何れの國にても知り居る様子なり

按に「アメリカ」辺の事にや先觸なしとても一両年前より企なれハ高船往来にて其噂ハ諸國へ流布せしなるへし「カミシヤーツカ」辺も本領の事故固より知る處し

嶋山のある近邊にても何方にても汐界ありて川の流れの如くなるを見當れり

何れの海中なりしか鰹魚幾千萬ともなく集りて船を覆すかと恐るゝ程の所あり船人銛（ヤス）を以て突留めて取り獲たりき

日本の事書物に仕立たる物使節持参し毎度見る様子なり外にも書籍類數々箱入にして携来れり何の事認し本にや尤横文字にて先方も此方の如き物にあらねハ外役付の者も書物持参せり

船中乗合の内先年魯西亜より「アンゲリ」へ援兵に加はり行きしと云人ありし船軍ハ第一に先きの船の帆柱を見當に石火矢を以て打ち折るやうにせる事

肝要なりとて其人申しけり

日本へ献上の色品を二三年前より心かけ出帆の年までに出来かぬる由

一 大鏡四枚前にいふ如し外に硝子鏡大小四拾餘大かたこれ魯西亜の都にて製造のよし

一 金象の造り物象の横腹に時斗を仕込時を打ては其鼻動く仕懸にす

一 象牙の細工物是も花を刻み繰抜に致せる細工至て手のこみたる物之年數懸りて出来かねし由 硝子の室(サヤ)をかけ置けり

一 腰刀にて直に鉄炮になる器もあり

一 「ムラムラ」と云石板の如く作り磨きあて献上物の臺となる様にしある者數多載せ来れり

一 創業の帝王ゟ以来歴代諸王の像を「ムラムラ」石にて彫刻せるものも持来れり

一 織物類數十巻持渡れり

一 セイウナの牙數本獻上心掛に持渡れり

一 鋏並に鉄炮類種々あり

右を見當りし分なり

阿蘭陀通辞石橋助左衛門は長崎にて通辞能く

こゝろゝ使節導きて来り
長崎にて彼人等日本漆器(ヌリモノ)類を見て甚く賞美せり　唐より来る物にこれには大に劣れりと云へり
又紙も薄く強くして至てよき手際のものと称せり
最初漂着の「オンデレイツケ」より日本迄の里数は同所より「オホーツカ」迄行くよりは道程近しと云幾里といふ事はきかれす　右「カベタン」の話なり
「オホーツカ」より蝦夷地「子モロ」迄十九日に来れりと先年光太夫を伴ひ来りし通辞「トコロフ」いへりと魯西亜の都より日本迄九拾千里

彼國里法なり
カミシヤーツカより日本迄四千七百里　彼里法之
右「カベタン」の咄なり
・長崎書上には
一　魯西亜國より日本迄の乗節里數左之通

オロシーア國府より　デー子マルカ江　五百里
デー子マルカより　ヱンゲランド江　六百里
ヱンゲランドより　カナリア島江　弐千里
カナアリヤより　ブラシリ江　三千里

ブラジリより
マルケイサ江　四千里

マルケイサより
カムシカツトカ江　三千里

カムシカツトカより
長崎まで　千里

〆壹萬四千百里

漂客將来の地圖ニ海路朱線を「アンゲリ」より
我日本長崎迄引きあり此海路里數間氏考定
する物あり如左

エンゲラントより
カナリア迄　七百里

カナリアより
ブラジリ迄　一千八百里

ブラジリより
マルケイサ迄　三千里

カミシヤーツカより
日本長崎迄　九百里

マルケイサより
カミシアツカ迄　二千八百里

通計九千九百里

此里數ハ皆我里程壹里三十六町を以て
是をいふ卽地球一周壹萬零壹百里
許を以て筭する所なり

右里數を記するハ傳聞によらす原図の海路
の度格ニ應し其路線の迂廻に随ひ
圓規を以て測り得る也是大約の里數と
或ハ傳聞よりハ精詳なる事一等なるへし
「ペトルブルク」より「アンゲリ」に至る海路ハ原圖

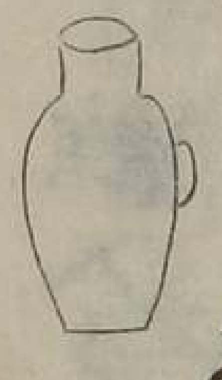
に記されし故に是に載せたり
長崎より書上と間氏考定せられしとハ大ひに差へり
書上にてハ「ヱンゲランド」より日本迄一萬三千里となる
間氏考定せる所ハ九千九百里なれハ書上の方
三千百里 里数多し

補光太夫雑話 丙寅丁卯両回聞ケル處也

ペトルペルヰイ 創業ノ帝王 二月上旬の誕生の由聞けり
テムボノオシツポイチ ホツケウイチをカミシヤーツカの
金奉行く光太夫か魯西亜文字を此人に習ひし師
匠なり
ニギタニコライイチデミドフといへる豪商ペトルブルカに
住居す其兄弟にニコライイデミドフといふものムスクウ
に住せて是亦大富家なり
カランスタンオストロフと云 湊をなして島へハ都より
五里船賃五十三銅銭也

イルコーツカの脇の小川の名をイルコースといふ大河を
アンガルといふ
ヤコーツカよりイルコーツカの間にキリキと云地有カミ
シヤーツカ近邊りチキリポリシヨレツカアソランスコ
なといふ地あり
カミシヤーツカ近島キリーキス　チヤフト　真南の方にあり此所に硫黄山あり
ナキリース　南の方　アンデレスカ　北の方是オンデレイツケなるう　ニツブロイボタ
温泉の事なり
彼國の麻を蕁麻（カラムシ）の類にて太短く繻半股引に
はくる反物皆此物にて織る紙を右繻半等の古手を
あつめ晒して漉し也紙ハ専ラ「ニジノゴセト」といふ國

より制衣し出して
胡瓜をオグリチイといふバイカル湖畔の船場ソモリヨと
いふ地より多く出す
サラナ　黒百合根之
コーレンといふ草有葉大にして根ハ牛蒡の如し是
にて製衣する酒あり我蝦夷地にも産す江戸へも移
し植へて植留御薬園にもあり
臙脂を唐山より来る懐中紅なり両頬へ付る也唇口へ
ハ不附
仙臺漂客ハ彼國の升ハ見かけぬといへり光太夫曰銅
にて形



如此作り極印ありてあるや此方の

一升少し餘入るなり
彼國プードといふ分銅を此方の四貫六二十五匁之
荷附馬の荷物ハ八貫目ゟ國中の定法なり
ポリノイドて病院也
チレガ青腿牙疳病ハ身體攣急病なり天稟壯實
なる者是を患ふる者ハ絶て踏ミ行くことハぬ
ものしてすくミ伸び間々愈るものあり此病氷解
する時節になれハ自ら力ゑミて愈るあり浴湯の内に
蟻を土と共に入れナニガ病人を入浴せしむ其内ゟ
在る枕をなし平臥し上ゟ四維紗をぬといふ而復ひて
全體を蒸して治する療治あり

客到りて主人挨拶に椅子にかゝらせやきといふ事を
サジイシといふ
ボシヨンと云ハ悪口に往きやあかきといふ事なり
スモトレとハ見る事をいふ向ふを見よといふ事を
タンヽスモトレといふ

環海異聞巻之十五 大尾